

中国地方において地方創生で活躍する J I C A ボランティア調査  
報告書

平成 27 年 3 月

JICA 中国

調査実施：公益社団法人 中国地方総合研究センター

## 目次

1. 各県における地域振興施策と地方創生の方向性
  - (1) 地方創生の基本的考え方
  - (2) 各県における地域振興施策と地方創生の方向性
  - (3) 各県における定住受入窓口等
  - (4) 地域づくりに関連するその他団体
  
2. 中国地方における地方創生関連の取組み状況
  - (1) 中国地方における地域活性化の取り組みとしての「地域おこし協力隊」の活動
  
3. 中国地方で活躍する協力隊員〇V
  - (1) 中国地方で活躍する各県の〇V
  
4. 協力隊〇Vの地方創生における活躍の可能性
  - (1) 中国地方の地方創生における先進性
  - (2) 協力隊〇Vの地方創生活動への親和性、活躍可能性

## 資料編

# 1. 各県における地域振興施策と地方創生の方向性

## (1) 地方創生の基本的考え方

人口急減・超高齢化という我が国が直面する大きな課題に対し政府一体となって取り組み、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生できるよう、まち・ひと・しごと創生本部が設置された。その下で、地方創生に向けて長期ビジョンと総合戦略が示された。

これによると、長期ビジョンでは「人口減少問題の克服」として、2060年に1億人程度の人口を確保（人口減少の歯止め：国民希望出生率＝1.8、「東京一極集中」の是正、「Ⅱ.成長力の確保」として、2050年代に実質GDP成長率：1.5～2%程度維持が目標として示された。

また、総合戦略では、表1のような基本目標を設定している。

こうした中で、青年海外協力隊OVが活躍可能な目標としては、地方における若者雇用創出や地方への新しいひとの流れをつくる、時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守る部分が該当するものと考えられる。

表1 基本目標（成果指標、2020年）

「しごと」と「ひと」の好循環作り		
<p>地方における安定した雇用を創出する</p> <p>◆若者雇用創出数（地方）</p> <p>・2020年までの5年間で30万人</p> <p>◆若い世代の正規雇用労働者等の割合</p> <p>・2020年までに全ての世代と同水準（15～34歳の割合：92.2%（2013年）（全ての世代の割合：93.4%（2013年）</p> <p>◆女性の就業率 2020年までに73%（2013年：69.5%）</p>	<p>地方への新しいひとの流れをつくる（現状：東京圏年間10万人入超）</p> <p>◆地方・東京圏の転出入均衡(2020年)</p> <p>・地方→東京圏転入6万人減</p> <p>・東京圏→地方転出4万人増</p>	<p>若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる</p> <p>◆安心して結婚・妊娠・出産・子育てできる社会を達成していると考えられる人の割合：40%以上（2013年度：19.4%）</p> <p>◆第1子出産前後の女性継続就業率：55%（2010年38%）</p> <p>◆結婚希望実績指標：80%（2010年：68%）</p> <p>◆夫婦子ども数予定（2.12）実績指標：95%（2010年93%）</p>
好循環を支える、まちの活性化		
<p>時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する</p> <p>◆地域連携数など</p> <p>※目標数値は地方版総合戦略を踏まえ設定</p>		

（注）下線、斜字体の部分が本調査で対象となる青年海外協力隊OVが地方創生で活躍が期待されるポイントとなる。  
資料：内閣官房まち・ひと・しごと創生本部「まち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」と「総合戦略」の全体像等」

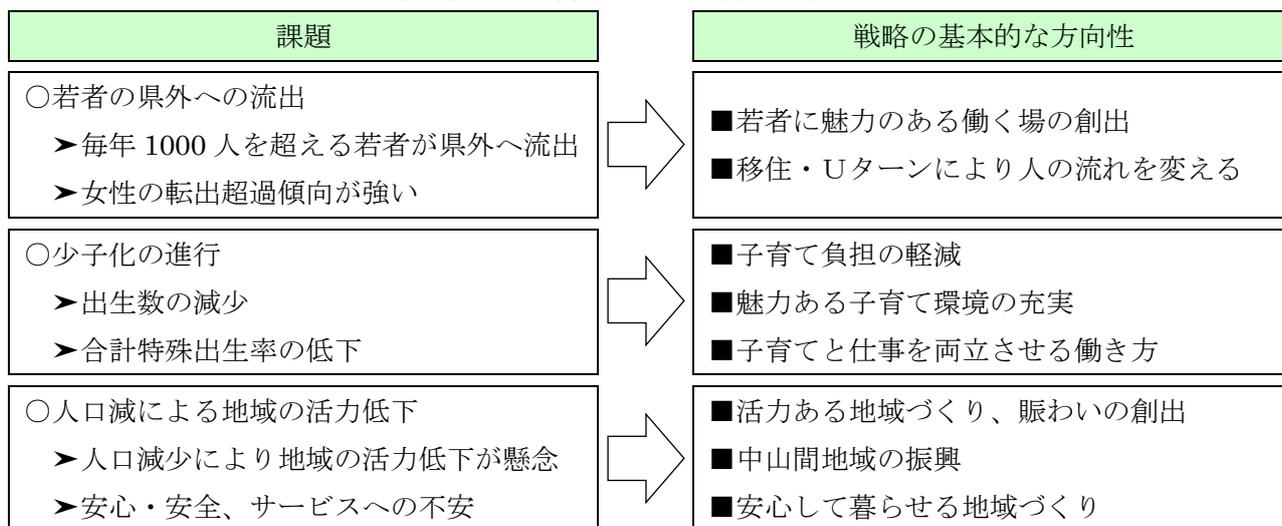
## (2) 各県における地域振興施策と地方創生の方向性

### ① 鳥取県

鳥取県の人口ビジョンからみた地方創生に向けた課題と戦略の方向性は、図2のように整理されており、若者に魅力ある働く場の創出、魅力ある子育て環境の充実、活力ある地域づくり、賑わいづくりなどが基本的な方向性として示されている。

鳥取県地方創生総合戦略（骨子素案）から具体的な取り組みをみると、産業振興・雇用創造に関連する項目が多く掲げられているほか、少子化対策・子育て支援や地域活性化に関する項目も比較的多くなっている（表2）。

図2 鳥取県の地方創生に向けた課題と戦略の方向性



資料：鳥取県資料より作成

表2 鳥取県地方創生総合戦略の主な施策（抜粋）

I 産業振興・雇用創造	
1 経済成長推進 ○成長リーディング産業の創出	4 観光振興 ○観光地の魅力向上
2 雇用創出 ○起業・創業の拡大	○戦略的な誘客プロモーションの展開と情報発信
3 農林水産業の振興 ○担い手育成・確保	○インバウンドの推進
○産地力アップによる所得向上	○MICE・教育旅行の推進
○とっとりフードバレーの推進	5 社会基盤の充実 ○空路・航路環境の充実 など
II 移住・Uターン	III 少子化対策・子育て支援
1 県外からの移住促進 ○移住促進・情報発信	1 出会いから出産までの切れ目ない支援 ○出会いの場の創出
2 Uターン・定住促進	2 子育て支援の充実 ○子育て環境の充実
3 地方大学の活性化	3 ワークライフバランスの推進
4 国機関の移設推進 など	4 魅力ある子育て環境創出 など
IV 地域活性化	V 多様な連携の推進
1 人が集い魅力ある地域づくり ○賑わいのあるまちづくり推進	1 企業・団体等との連携
2 中山間地域振興 ○中山間地でのしごと創出	2 行政間の連携 など
○小さな拠点づくり	
3 安心して暮らせる地域づくり ○共生のまちづくり など	

資料：鳥取県資料より作成

## ②島根県

島根県では、2015年4月に知事選挙を控えており、具体的方向性を示すのは選挙後、新知事が就任してからとなる見通しである。

なお、現在は、知事と市長会、町村会との協議、県と市町村の課長級職員で構成するワーキンググループ等を設置し、地方版総合戦略の策定に向けて連携を図っている。

今後は、出雲、石見、隠岐の圏域における市町村間連携を視野に入れたワーキンググループの設置を予定している。

島根県における地方創生の取り組みの方向性を反映していると考えられる2014年度2月補正予算の内容は次ページの表3の通りである。主には「しごとをつくり、安心して働けるようにする」に関する内容が多く、地域での雇用創出や産業集積の高い食料品関連産業の振興等が新規事業となっている。また、「島根への新しい人の流れをつくる」のUIターン対策の強化についても多くの新規事業に取り組むこととなっている。

なお、島根県からの聞き取りによると、定住施策、中山間地域対策等の充実を図るとともに、産

業面での島根県発のプログラミング言語・Ruby を活用した ITC 関連産業の集積強化による雇用創出などが重点項目として挙げられている。

表3 島根県における地方創生関連で2014年度2月補正予算に計上された項目（主なもの）

1. しごとをつくり、安心して働けるようにする	
(1) 商工業・観光振興 ○小中学生の隠岐体験学習 ○出雲空港の新規路線開設の支援 ○食品産業の総合支援 (2) 農林水産業振興 ○水田農業の緊急支援 ○しまね和牛生産基盤強化対策 など	(3) 雇用対策 ○地域しごと支援 ○県内の高校生、大学生を対象としたインターンシップ ○企業情報の発信力強化 ○人材不足・定着対策 など
2. 島根への新しい人の流れをつくる	
○U I ターン情報の発進力の強化 ○市町村定住支援体制の強化 ○しまね型仕事創生事業 ○U I ターン人材確保就業支援 ○介護人材確保・定着事業 など	3. 若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる ○少子化対策推進強化事業 ○みんなで子育て応援事業 など
4. 時代に合った地域をつくる	
○住み続ける地域サポート事業 ○私立高等学校等による地域産業を担う人材育成への支援 など	

資料：島根県資料より作成

### ③岡山県

岡山県では、2015年1月に、人口減少問題を克服し、本県の持続的な発展の実現に向けて、「おかやま創生総合戦略推進本部」を立ち上げ、岡山県版の総合戦略を策定し、戦略に掲げる実効性のある対策を迅速かつ的確に推進することとしている。

総合戦略は、晴れの国おかやま生き生きプランの基本的方向性を踏まえつつ、人口減少問題克服の観点から重点戦略に盛り込まれている施策の重点化等を図るとともに、様々な主体と連携し、本県の強みを生かしながらより実効性のある対策を推進し、岡山県の持続的発展に向けた道筋を示すものとする予定である。

講ずべき対策としては、次ページの表4で示す通り、「人口減少に歯止めをかけるための対策」と「人口減少社会に的確に対応するための対策」の2つに区分されており、社会減対策や地域経済の持続的発展に関する項目が多くなっている。

表4 おかやま創生総合戦略（仮称）骨子素案 講ずべき対策

人口減少に歯止めをかけるための対策	
[若い世代の希望をかなえる少子化対策の推進（自然減対策）] ○次世代育成に向けた意識の醸成 ○安心して家庭を築ける環境の整備（出会い・結婚） ○妊娠・出産の希望がかなう環境の整備（妊娠・出産） ○子育て支援の充実（子育て）	[人を呼び込む魅力ある郷土岡山づくりの推進（社会減対策）] ○産業振興と雇用創出 ○多様な人材が活躍する社会の実現 ○移住・定住の促進 ○魅力ある教育環境の整備 ○安全・安心な地域づくり ○拠点機能の確保 ○情報発信力の強化
人口減少社会に的確に対応するための対策	
[地域経済の持続的発展のための生産性の確保] ○生産性向上と高付加価値化の促進 ○女性・高齢者等の労働参加率の向上	[地域の持続的発展のための活力の維持] ○地域社会の活性化 ○行政運営の効率化・最適化と連携の推進

資料：岡山県資料より作成

#### ④広島県

広島県では、地方創生総合戦略プランの策定に向けて検討を進めており、2014年度2月補正予算において、地方創生関連予算を計上している。

地方創生関連の補正予算（表5）では多くを新しい経済成長に関する事業に配分しており、創業・新事業展開の促進や魅力ある観光地づくりと観光情報発信の強化等を挙げている。また、人づくりではプロフェッショナル人材の確保やグローバル人材の育成確保、豊かな地域づくりでは、中山間地域対策を多く配分されている。

なお、広島県では、県の長期ビジョンである「ひろしま未来チャレンジビジョン」の見直しを予定しており、人口ビジョン、地方版総合戦略についても連動して策定することとなっている。

表5 広島県の2014年度2月補正予算（主なもの）

<b>①新たな経済成長</b> ○創業・新事業展開の促進 ○魅力ある観光地づくりと観光情報発信の強化 ○「海の道構想」の推進
<b>②人づくり</b> ○県外大学生等のU・Iターン就職の促進 ○プロフェッショナル人材の確保 ○グローバル人材の育成・確保
<b>③豊かな地域づくり</b> ○東京圏から広島への定住促進 ○中山間地域における就業機会の創出 ○中山間地域を支える人材育成・ネットワークづくり ○中山間地域が抱える課題解決の支援

資料：広島県資料より作成

## ⑤山口県

山口県では、「活力みなぎる山口県」の実現に向けて、「社会減」「自然減」の両面から人口減少対策に取り組むとともに、人口減少・少子高齢社会が進行する中であっても、活力ある地域の中で、県民誰もがはつらつと暮らしていくことができるよう、地方創生の取組を進めていくこととしている。

また、2月補正と明年度当初予算を一体的に編成して、地方創生の先行的な取り組み等を積極的に実施することとしており、総合戦略骨子（案）の施策展開（表6）では、産業振興による雇用の創出や持続可能で元気な地域社会の形成で多様な施策を検討している。

なお、山口県の取り組みで特徴的な点として、地方創生の具体化に向けて多様な主体と連携した検討を進めていく体制づくりを進めている。2015年2月に設立された県・金融機関・商工団体 地方創生連絡会議は、地方創生を地域の金融機関・経済界と連携した取り組みとすることで実効性のあるものにすることを目指している。さらに、山口大学との地方創生に係る包括連携協定を締結し、学生の県内就職促進、新事業・新産業の創出、地域人材の育成、大学の地域貢献について連携して推進することとしている。

表6 山口県まち・ひと・しごと創生総合戦略「骨子（案） 施策展開

(1)産業振興による雇用の創出	(2)人材の定着・還流・移住の推進
①産業力の強化 ②次世代の産業育成 ③中堅・中小企業の応援 ④元気な農林水産業の育成 ⑤観光力の強化	①やまぐちへの定着支援 ②やまぐちへのひとの潮流づくり
(3)結婚・出産・子育て環境の整備	(4)持続可能で元気な地域社会の形成
①子育てしやすい環境づくり ②次代を拓く教育の充実	①暮らしやすいまちづくりの推進 ②中山間地域の元気創出 ③安心して暮らせる地域づくり ④地域連携による経済・生活圏の形成

資料：山口県資料より作成

## ⑥地方創生における青年海外協力隊OVへの期待

「地方への新しいひとの流れをつくる」方策において、各県ともに地方版総合戦略において地方へ人口の流入・定住を掲げているが、その対象となる人材について具体的なイメージを持っていない。

その中で、青年海外協力隊OVは地方への人の流れを作る対象の一つとして考えることができる。広島県からは、OV人材の地方での活動拡大を歓迎するコメントがあった。特に、UIJターンとしての東京一極集中の是正と地域における新たな活動（起業、コミュニティ支援）を主導する人材として期待できるとの意見があった。

こうした可能性を踏まえ、青年海外協力隊OVが地方創生の現場で活躍できる分野等の検討を行う。

### (3) 各県における定住受入窓口等

各県においては、U I J ターンの受入促進のため、県やその関連団体により、P R 活動、受入相談、体験イベント開催などを行っている。

各県の窓口団体等は以下の通り。

表 7 各県の定住受入窓口等

鳥取県	公益財団法人ふるさと鳥取定住機構 <a href="http://furusato.tori-info.co.jp/">http://furusato.tori-info.co.jp/</a> <a href="http://furusato.tori-info.co.jp/ijju">http://furusato.tori-info.co.jp/ijju</a> (とっとり移住定住ポータルサイト・鳥取来楽暮) 鳥取県への移住定住・就職定住、若年者の就職定住、人材を探している企業をサポートする団体
島根県	公益財団法人ふるさと島根定住財団 <a href="http://www.teiju.or.jp/">http://www.teiju.or.jp/</a> <a href="http://www.kurashimanet.jp/">http://www.kurashimanet.jp/</a> (しまね UI ターン総合サイト・くらしまねっと) 島根県の定住情報の提供、定住相談の充実、若年者を中心とした県内就職促進と人材の育成、U・I ターン受け入れ施策の強化、地域活性化を担う人々の連携支援を行う団体
岡山県	移住・定住ポータルサイト「おかやま晴れの国ぐらし」 <a href="http://www.okayama-inaka.jp/">http://www.okayama-inaka.jp/</a> 岡山県県民生活部 中山間・地域振興課が運営する移住定住に関するポータルサイト。岡山県内 27 市町村と岡山県から、移住や交流を検討している人へ情報を提供。
広島県	広島県交流・定住促進協議会 <a href="http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kouryuuteizyuportalsite/">http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kouryuuteizyuportalsite/</a> (交流定住ポータルサイト「広島暮らし」) 県内市町と国、関係民間団体および県で設立された協議会。受け入れ体制の整備、マーケティング・広報戦略を二つの柱として取組を展開 広島県HPにおいて交流定住ポータルサイト「広島暮らし」で情報発信
山口県	UJI ターン支援サイト「見つけて！やまぐちニューライフ」 <a href="http://www.ymg-uji.jp/">http://www.ymg-uji.jp/</a> 山口県政策企画課が運営するU I J 支援サイト。市町村の紹介や、仕事や暮らしの紹介、地域にとけこむ方法などの情報を提供。 なお、山口県若者就職支援センターY Y ジョブサロンではU I J ターン向けの就職情報の提供も行っている。( <a href="http://www.joby.jp/uturn/">http://www.joby.jp/uturn/</a> )

### (4) 地域づくりに関連するその他団体

地域づくりに関連するその他団体としては、国内唯一の中山間地域研究拠点である「島根県中山間地域研究センター」や「道の駅」の整備のきっかけを作った「中国地域づくり交流会」などがある。

表 8 地域づくりに関連するその他団体

島根県中山間地域研究センター ( <a href="http://www.pref.shimane.lg.jp/chusankan/">http://www.pref.shimane.lg.jp/chusankan/</a> ) 国内唯一の中山間地域研究拠点。中山間地域に係る地域振興や農業、畜産、林業の試験研究を総合的に実施、中山間地域の現場でのサポート活動、研究成果、実践ノウハウの情報発信、各種研修事業の実施などを主な役割としている。
中国地域づくり交流会 ( <a href="http://www.c-haus.or.jp/">http://www.c-haus.or.jp/</a> ) 産・官学・野の、分野を越えた人の集まりで、自分たちの身近な地域だけでなく、県や市町村の行政区域の垣根を越えたより広い交流の輪の中で、まちづくりを考え、実践する組織です。横断的、広域的な人と情報の交流の場。 1990年に開催した「中国・地域づくり交流会」の会合で「道の駅」が提案されたことで有名。現在も、各地の道の駅のネットワーク機能を果たす。

## 2. 中国地方における地方創生関連の取組み状況

### (1) 中国地方における地域活性化の取組みとしての「地域おこし協力隊」の活動

#### ① 地域おこし協力隊の概要

中国地方では、全国に先駆けて少子高齢化、過疎化の進展にともない、1980年代以降、各地で地域活性化（むらおこし）の活動が活発に行われてきた。

こうした取組みが一定期間経過し、近年、初期の活動を先導してきたメンバーの高齢化により、地域活性化の活動が担い手不足により低下している状況がみられ、地域課題を解決する人材の確保が地方の大きな課題となっている。

こうした状況を踏まえ、2009年度より総務省において「地域おこし協力隊」の制度が導入された。この制度は、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とするものである。

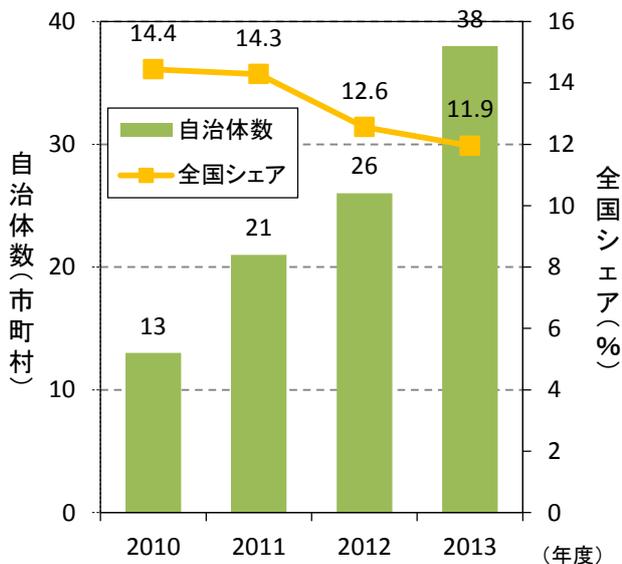
具体的には、地方自治体の募集により、都市住民を受入れ、地域おこし協力隊員として委嘱し、一定期間以上、農林漁業の応援、水源保全・監視活動、住民の生活支援などの各種の地域協力活動に従事していただきながら、当該地域への定住・定着を図っている。

この制度は、地方創生における大都市圏から地方への人口流入を促進する先駆的取組といえる。

#### ② 中国地方における地域おこし協力隊の活動状況

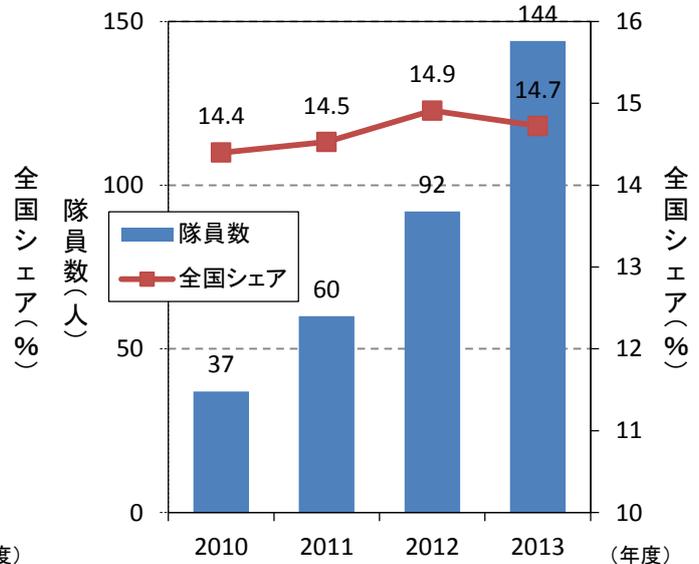
中国地方では、平成25年度時点で38自治体、144人が活動しており、全国シェアで自治体が約12%、隊員数で約15%を占めている（図2、3）。この数値は、1自治体当たり隊員数が他地域よりも多くなっていることを意味しており、各地域内での隊員間のネットワーク化等も図られやすい（活動しやすい）環境があると考えられる。

図2 地域おこし協力隊・受入自治体数



資料：総務省「地域おこし協力隊の活躍先」

図3 地域おこし協力隊・隊員数

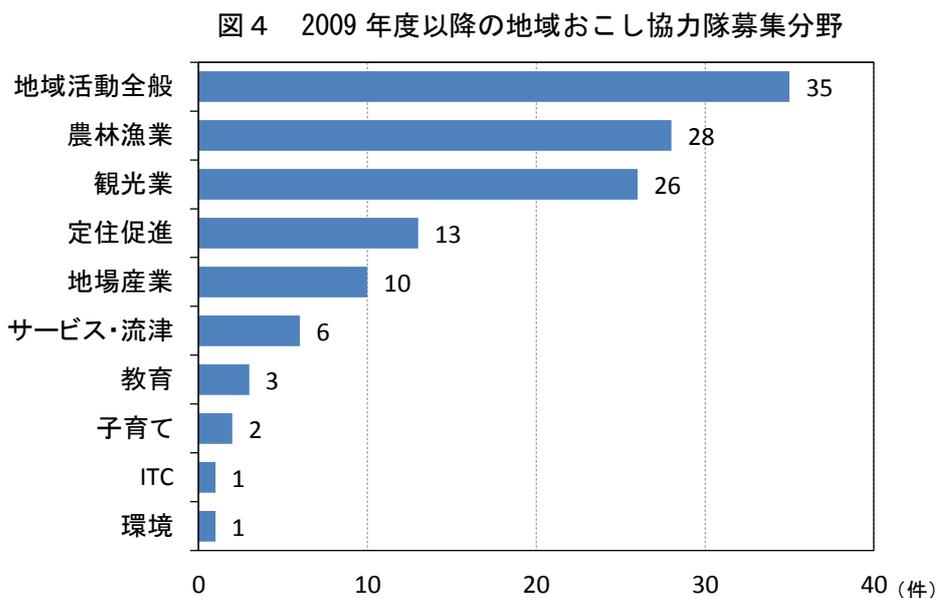


### ③中国地方における地域おこし協力隊の具体的な活動内容

中国地方での地域おこし協力隊のこれまでの募集内容（2009年度以降）から、その活動の傾向を整理した。なお、ここで整理した活動内容は、（一社）移住・交流推進機構が運営する「地域を変えていく新しい力 地域おこし協力隊」ホームページ（[www.iju-join.jp/chiikiokoshi/](http://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/)）の活動検索に掲載された内容を元に整理を行った（個別の募集内容については資料編を参照）。

活動の分類については、各募集内容を主な活動となっているものを2分野まで設定し、集計した。

これによると、地域活動全般（集落の維持・活性化、生活支援等）が35件と最も多く、これに農林漁業、観光業がつづく。このほか、定住促進、地場産業なども10件以上とやや多くなっている（図4）。



資料：（一社）移住・交流推進機構「地域を変えていく新しい力 地域おこし協力隊」HPより作成

地域おこし協力隊で募集された活動内容は、現在の地域課題を明確に反映したものとなっていると考えられる。つまり、中国地方の各地域の人材に対するニーズを示すものとなっている。

こうした地域ニーズを踏まえ、青年海外協力隊OV人材の地域への定着を促進していくことが重要である。

## 3. 中国地方で活躍する協力隊員OV

### (1) 中国地方で活躍する各県のOV

地方創生に向けての具体的な方策の検討においては、地方へ人材が還流し、定着・活躍することが大きく期待されている。

こうした中で、地方への人の還流の一環として、青年海外協力隊OVも、地方出身者を含め、海外での生活からU I Jターンしてくる人材として位置づけ、その活躍が期待されるものと考えられる。

ここでは、こうした地方創生における協力隊OVへの期待を先取りした形で、中国地方の地域づくりや活性化の取り組みにおいて活躍する人材について紹介する。

なお、ここで取り上げるOVについては、各県のJICAデスクより推薦された方から、取り組み分野、活動の独自性などを勘案し、各県2名程度を抽出した。

表9 中国地方で活躍するOV紹介リスト

(敬称略)

氏名	出身県	活動市町村	活動概要	協力隊	
				派遣国	分野
長谷 洋介	東京都	智頭町	新田サドベリースクールを運営し、子どもの主体的な学びの場を提供	フィリピン	理数科教師
田中 正之	鹿児島県	日野町	農業に従事しながら、地域での国際貢献等の講演活動を展開	パプアニューギニア	理数科教師
生越 大地	島根県	大田市	農家の連携により、畜産農家から出る堆肥と稲藁の循環させる仕組みを作り、収穫向上を図る	中国	果樹
中島 浩司	島根県	大田市	民家再生を積極的に行うなど、地域コミュニティを重視した事業を展開	ガーナ	建築施工
小林 勉	岡山県	岡山市	農業に従事しながら、ラオス・カンボジアなどの農村の経済的自立を支援する「アジア農村協力ネットワーク岡山」の代表を務める	バングラデシュ	養殖
塩飽 康利	岡山県	井原市	耕作放棄地での農園を運営し、街づくりとして農産物を活用した特産品開発に取り組む	エチオピア	農業土木
細川 光宜	広島県	広島市	東日本大震災や広島市土砂災害において、いち早く現場に入り住民と協力して復興活動を支援	パプアニューギニア	木工
羽熊 広大	広島県	広島市	チャレンジ農園吉山を運営し、地域活性化・商品開発等を実施	グアテマラ	農業
唐井 ゆかり	広島県	三原市	地域おこし協力隊として三原市大和町で農業、地域イベント企画・運営を担う	ガーナ	感染症・エイズ対策
藤村 美都子	山口県	宇部市	世界の医療団で活動後、地元の病院で看護師として勤務。所属先でD-MATの立ち上げ運営に関与	中国	看護師
松浦 和子	山口県	防府市	フェアトレードショップを運営するほか、市民活動センターで国際協力・交流等の活動を実施	ヨルダン	保健師

## 豊かな自然の残る地域における子ども達が主体的に学ぶ学校づくり

氏名	所在	分野
長谷 洋介 さん	鳥取県智頭町	幼児教育・学校教育



### 【活動の概要】

新たな教育の在り方を模索し、子ども達の主体的な学びを提供する「サドベリースクール」を2015年5月に開校。「森のようちえん・まるたんぼう」付属学校として、地域づくりの先駆けの地・鳥取県智頭町新田集落に新たな風を吹き込む。

### 【青年海外協力隊での活動】

東京出身の長谷洋介さんは、都会の生活とは異なる田舎において自然の近くで農的な生活をしたいという考えがあり、鳥取大学進学後、友人と古民家を借りて農業等を行い自給的な生活をしたり、地域活動等へ積極的に参加するなどの経験をしていた。また、長期休暇にはバックパッカーで海外を旅行し、そこでも都会より田舎の魅力を強く感じたことから、将来的に田舎での生活・活動を行いたいという気持ちが高まっていった。

大学卒業時に教育分野に関心を持ったことから、教員などを目指して活動を始めたころ、青年海外協力隊で理数科教員が不足していることを知り、海外生活を経験したいという希望もあり、協力隊への応募を決めた。地域的には大洋州での活動に関心があったため、希望を出し、2007年にフィリピンに派遣されることとなった。

派遣前は、現地での教員としての活動を希望していたが、実際は現地の教育委員会で指導主事と共に研修のコーディネーターや学校巡回等の役割を担うこととなった。希望とは異なる仕事ではあったが、現地で活動するにつれ、自分自身のできることを取り組むべきと気持ちを切り替え、現地での自分自身の居場所を見出しつつ、地域とのネットワークが広がっていったこともあり、現地の人からの相談を受けるようになり、時間をやりくりしながら前向きな活動へと転換していった。



フィリピンでの活動の様子

### 【地域での活動を始めた経緯】

青年海外協力隊での派遣が満了する時期に、現地に残るか帰国するかを考える中で、もう一度、鳥取に戻ってみようと考え、帰国を選択した。

2009年に帰国後、鳥取大学の先生から智頭農林高校の講師として働くことを勧められたのがきっかけとなり、智頭町の魅力を知るとともに、2009年に「森のようちえん まるたんぼう」が智頭町に設立されたことにも関心を持つようになった。その後、同じく青年海外協力隊OVで帰国後保育士として働いていた奥さんも森のようちえん・まるたんぼうに関心を持ち、働き始めたこともあり、2011年から智頭町新田集落の短期移住者向けのロッジ「トンボの見える家」で生活をスタートさせた。

「まるたんぼう」での活動が進むにつれ、卒園児の保護者から森のようちえんの教育を継続的なものにしてほしいとの希望の声があったことから、次のステップとして付属学校について検討が進められ、公教育とは異なる教育の選択肢として、アメリカのマサチューセッツ州の先生・カリキュラム・テスト・評価のない学校、こども達の好奇心に沿った遊びや体験から学んでいく学校である「サドベリー・バレー・スクール」をモデルとして、長谷さんの生活の場であった新田集落を拠点として考え、地域との調整を進め、人形浄瑠璃の館等の施設を活用し、活動を進めることとなった。



新田集落での活動の様子

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

智頭町森のようちえん まるたんぼう付属学校「新田サドベリースクール」は、2014年から週末の土日で試行的に開始され、2015年度からは平日クラスと土曜日クラスの2つのコースで本格的に展開されており、平日クラス7名（智頭町6名、西栗倉村1名）、土曜日クラス20名程度（地元児童も含む）で実施されている。なお、平日クラスは公立学校に籍を置きながらサドベリースクールに通学するフリースクール等と同様の形態をとっている。

サドベリースクールの教育理念では、子どもの自主性・主体性を尊重し、寄り添い、サポートすることを重視しており、現在のお仕着せの教育とは異なる手法をとっている。

また、新田集落の村の営みから学び、体験し、時に発展させていく活動を目指している。新田集落は地域づくりの先進地として全国から注目される存在であるが、それを主導してきたメンバーも高齢化し、世代交代が必要な時期にきている。長谷さんは、このタイミングでサドベリースクールを新田集落でスタートさせることは意義があると考えている。また、地域からは応援してくれる人、新しい取り組みを拒む人など様々ではあるが、全く反対という状況でないことから、地道に取り組んでいくことで、理解をしてもらい、地域に子どもの声が響き渡ることによって、新たな活力となることが期待される。

こうした新しい教育と地域づくりを融合した取り組みは、様々な切り口が期待され、面白い取り組みになると考えられる。



新田サドベリースクールの様子  
<http://shindensudbury.org/>

### 【地域と世界を結ぶ視点】

青年海外協力隊での海外での教育の経験や鳥取県智頭町における北欧で始まった森のようちえんの考え方を取り入れた活動に参加したことから、新たな教育ニーズの受け皿として、アメリカのサドベリースクールをモデルとした取り組みへとつながるなど、長谷さんの考える教育のイメージと広い視野で今の教育に必要なことを結びつけた取り組みを地方で展開している点は、既存の教育の考え方にとらわれない自由度があり、それを支援する地域（自治体）があることは地方にも面白いところが

あることを全国に発信している。

新田サドベリースクールへのニーズは地域にはあまり多くはない。実際に平日クラスはほとんどがIターン等の移住者の子どもである。ただし、全国、国外まで広げれば、こうした学校の選択肢を求めるニーズは一定数あると考えられる。公教育を否定するのではなく、子どもの学びの選択肢を増やすという意味で重要な役割を担っている。

#### 【帰国後の地方定住のススメ】

青年海外協力隊に参加する人は、面白い人が多く、思いを持った人も多い。経済的な厳しさはあるかもしれないが、そうした思いを少しずつ社会へ反映させていく取り組みを行っていくことは重要である。

地方は、都市と比較して人口は少なく、雇用や経済的な収入も少ないかもしれないが、それを補いうるお金で換算できない自然の恵みや農業などがある。

「足るを知る」ではないが、経済的な面を求めなければ、家族との時間は田舎の方が多く持てる。そうした価値観を持っている人にとっては、田舎には多くのチャンスがある。一步を踏み出せば、周辺の人が助けてくれる。田舎では自分の存在意義を見出しやすい環境にあると思う。

## 農村地域に移住して農業を行いながらイベント活動や情報発信活動を推進

氏名	所在	分野
田中 正之 さん	鳥取県日野町	農業



### 【活動の概要】

農業を主体とする地域に移住して大規模農家に就業し、米作りの仕事を本業とする傍らで、借り受けた農地で自らも米作りなど農業活動を行う。その一方で他の移住者と新たな文化的イベント活動を企画・推進し、地域に人を呼び込むほか、世界一周旅行をしてその体験をまとめて出版し、協力隊での経験と合わせて講演活動を行っている。

### 【青年海外協力隊での活動】

田中正之さんは、鹿児島県出水市出身で鳥取大学農学部卒。大学のとき授業の一環として乾燥地農学実習で1か月、その後現地研究機関との共同プロジェクトの研究補助員として8か月、メキシコに滞在した経験があった。だが以前から海外で仕事をして暮らしてみたいこともあり、大学の理数系学部卒業者であれば教員免許が必要とされなかった理数科教師として協力隊に応募。大学卒業直後の2007年～2009年、パプアニューギニアに派遣された。市域から1時間ほどの地方に赴任し、中高等学校段階の生徒を受け持った。



パプアニューギニアでの活動の様子

協力隊が初めての社会経験であり、手探り状態で進めた。日本とは感覚の違いがあり、約束がうまく伝わらないことがあった。その一方で教師・生徒・保護者の関係性にも違いがあり、保護者が前面に出ず、先生は敬われるのでやりやすい面はあった。生活環境でも停電はよくあるが電気は通じ、雨水をタンクに貯めて利用する設備もあり、食べ物も育つところだったので困ることはなかった。

コミュニケーションでは英語が通じ、人懐っこい人が多かった。また第二次大戦での日本に対するイメージを心配したが、とても親日的だったので特に苦労した思いはなかった。ただ、授業がとても多く忙しかったので、それに慣れるまでが大変だった。

### 【地域での活動を始めた経緯】

鳥取県に戻ることは予定していなかったが、農山村ボランティアで日野町に来たことをきっかけに、そこで農業の職を得ていた大学時代の友人が、農地や機械を譲ってもらい農家として独立することになり、一緒にやろうと誘ってきたことから日野町に住むことにした。そして町内の大規模農家に職を得るとともに、自らも農地を借りて兼業で米作りを始めた。

移住して4年目の2013年に一旦退職し、夫婦で1年間の世界一周旅行を計画し33か国を回った。帰国後日野町に戻るかどうかは決めていなかったが、元の職場から声がかかり再雇用してもらい、再び町内で活動を続けている。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

農業活動では農地の利用権を提供してくれた人が販路も譲ってくれたおかげで、自家米は農協を通

さず個人売買している。また、担い手が不足する農家の依頼で援農活動も行っている。農村地域には国の橋渡しする組織などを通じてワンクッションを置くと、移住者にも農地を貸してもらえる制度的後押しがある。そこでは地域のキーマンになる人や世話をしてくれる人がいるので、そうした人たちを頼りながら進めることができる。ただ自分からやらせてもらうようがむしやりに働き掛けるのではなく、やる気を見せながらタイミングを計る感覚が大切である。



現在、文化庁支援事業の一環で芸術家に町内に滞在してもらい作品づくりを行う「鳥取藝住祭・奥日野里山藝住祭」を、町内在住のIターン定住者とともに進めている。さらにネパール地震後のチャリティイベントを企画し、県内や近隣の岡山県内などから参加者を呼び込んでいる。



農業・イベント開催の様子

協力隊のときは本業以外の活動は忙しくてできなかったが、今は時間が自由になるので、やりたい活動ができる。そうした活動を通じて、参加した人とは新たなつながりもできるので、自分たちを知ってもらうことが大切だと考えている。

### 【地域と世界を結ぶ視点】

世界一周旅行中は海外農業実習や協力隊活動などで培ったスペイン語や英語の能力を活かすことができた。安宿や知人宅に滞在しながら移動したが、これまでの経験を踏まえ注意すべきことを押さえながら安全に行動することができた。そうした様々な海外体験から、現地の人々と新たな関係づくりも構築でき、ネットを通じた交流が現在でも続いている。

さらに世界一周旅行や協力隊活動での経験をもとに、周辺地域の公民館や図書館などをはじめ、鳥取市や大阪市などの他都市で講演活動を実施したほか、学校や公民館生涯学習講座の国際理解に関する出前講座を行った。そして自らの経験や地域でのイベントについて、ネットで情報発信するとともに、旅行体験をまとめた著書「さまよえる田中」（田中愛子・田中正之著、今井出版発行）を出版し、書店やネットを通じて販売している。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

協力隊から戻った後は、参加したいことややりたいことがあるならやってみるべき。そこに特別なビジョンはなくても何とかなる。途上国の派遣先から帰ると日本の都会は刺激が強いと感じる反面、地方は感覚が近いので生活するには良い環境と言える。仕事も色々あり、生業を持ったとしても複数の仕事ができる。自らも農業やイベント活動のほかに、小学校のカヌー教室の講師などもしている。

田舎では移住者は何を始めても注目される。その地域の常識と多少違うことをすると色々言われるかもしれないが、周りに迷惑をかけておらず、響きを買うようなことをしていない限りは気にしないでもよい。何かを行おうとするときもあせり過ぎず、周りの人に知らせ、手順を踏むようにする。それができれば地方の人は世話好きなので、そちらから声がかかるようになる。そういう点では全く知らない外国の任地に赴任するのと、地縁も血縁もない国内の田舎に行くのは似ている。

協力隊での仕事は問題があれば解決しないと進まないなので、そうした環境が人を変える。田舎に来たとしても、周りすべてを合わせなければならぬと考えるのではなく、あいさつから始めて自分のペースで関係づくりをしていくようにすればうまくいく。

## 地域内連携で進める自然の循環を活かした農業

氏名	所在	分野
生越 大地 さん	島根県大田市	農業



### 【活動の概要】

他の農家と連携して地域内で回せる農業を模索。畜産農家から出る堆肥を田に入れることで収穫を向上させる一方で、稲作によって生じる藁を牛の飼育用として畜産農家に返す仕組みを構築。地域の農家による藁回収と畜産堆肥供給のための組織を立ち上げ、組織内外の農家に堆肥を供給し、収穫向上に貢献している。

### 【青年海外協力隊での活動】

生越大地さんは、実家が農家だったため、最終的には農業を行うつもりだった。前職では島根県農業指導部に所属する農業普及員を3年務め、農業大学校で指導技術者としても在籍した。

30代のとき農家指導の折、「まだ若いし引退まではあと40年もある」と口にしたとき、相手の農家から「あと40回しか作れないではないか」と返された。その言葉に今のうちにできることを経験すべきだと悟った。自分をステップアップさせ、1人でどんなことができるのかを見極めるため、また家業に戻る前にワンクッションを置いて世界の農業を見ようと、公務員を辞して青年海外協力隊に参加した。



中国の農園関係者との様子

2000年12月～2003年5月、中国北京郊外にある日中合作のリンゴ果樹園である「中日友好観光果樹園」へ赴任。2年半に渡り樹の切り方や管理方法などの果樹指導を行う。すでに日本からの技術導入が試みられていたが軌道に乗っていなかった。仕事の仕方はトップダウンが基本であり、現場は指導員の指示に従うのみで自らは考えようとせず、下から上に意見を上げるフィードバックのシステムがなかった。指導員と現場で働く人の連携を模索し、指導員の上のトップにも働きかけをした。

中国の果樹園では日本と異なり果実が最も大切という認識があり、それを実らせる樹が大事という感覚がなかったので、幹の病気を防ぐための技術を伝えることに腐心した。

言葉の壁が大きく、ニュアンスを伝えられず上層部と意見の齟齬が生じ、受け入れてもらえないこともあったが、こうした活動の中から1人では何もできないことを学んだ。持てる技術が高くて人々とうまくコミュニケーションを取ることが重要だった。

### 【地域での活動を始めた経緯】

帰国後は自給自作の農業を進めたい思いを持っていた。実家には7haの農地があり、そこで農業を続けようと思っていたので、迷わずUターン就業した。

稲作を進める中で牛の堆肥を田に入れる農法を進めて収穫を上げる一方で、収穫後に出る藁を牛の飼育用として畜産農家に返していた。他にもこうしたやり方を取り入れたいとする稲作農家も出てきた。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

堆肥散布の動きが次第に大きくなってきたため、域内での連携が必要となった。地元の中で回せる仕組みにするため、3軒の稲作農家が協力して糞の回収組織を立ち上げた。これにより田に堆肥を入れる農家が増えたことから、6軒の農家により堆肥散布を行う「合同会社アルバFC（ファーマーズクラブ）」を組織した。現在は組織外からの堆肥散布依頼も受け付け、地域稲作の収穫向上に貢献している。



地域の園児との田植え

島根県は農業の点からは輸送環境が弱いのでコストがかかる。しかしその一方で自然に満ちたところなので、この田舎であることのメリットをアピールすることによって人に来てもらうようにできる。域内は海も山の近いので、消費者向けの農業だけでなく、観光と農業を一体化させた農業観光を展開できる可能性がある。その点からは現在遊び程度の規模だが、自らも空いた土地に中国で得た知識を活かしながら、リンゴの樹を植え付けて交流の場としている。また昔ニュージーランドを回った折に自然の野山を巡るトレッキングコースが充実していることに目を引いた経験があるが、島根では自然だけでなく農村を回り農家民泊できるようなコースが作れるのではないかと考えている。



家族で種まき準備

### 【地域と世界を結ぶ視点】

自分だけの思いを通そうとしても何も進まない。ものごとを進めていくために最も必要なのはコミュニケーションであり、色々な人の意見を取り入れながら自分の意見もぶつけることで相乗効果が表れて物事が進む。

これまでの農業は生産物を農協に出荷することが主体だったが、世界の中での日本の農業環境は変化してきているので、色々な売り方を模索しないと身動きが取れなくなる恐れがある。稲作以外の農業や観光分野、流通分野など、他の分野との連携も築いていくことで、新たな環境に対応することができる。その基礎となるのはやはり分野の垣根を越えたコミュニケーション。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

協力隊に参加しようと思うならば、モチベーションを強く持ち自分がやりたいことを明確にすることが大切。それさえできていれば色々困難はあるが、行けば何とかなる。

様々な点で日本の方が特殊なところ（時間通りに進むこと、約束を守ることなど）があるので、海外では日本の感覚をまず捨てる必要がある。日本で考えていた想定をはるかに超えるできごとがたくさん起こるので、それを臨機応変に乗り越えることができれば面白い活動ができる。逆に向こうの感覚が染み付くので、帰国後逆カルチャーショックがある。その際にも臨機応変さが必要になる。

日本の農村地方では「地域おこし協力隊」などのコーディネートをできる人を望んでいる。協力隊員は任地でそうした経験を積んできているのでコーディネーターに向いている。

Iターンで地方に来る人にとっても、地元で受け入れてもらい人と何かをする際に必要なのはコミュニケーション。海外では考え方に裏表がないので、日本の方が難しいこともある。ただ人と接するコツは日本も海外も一緒。

## 地方の空き家や古民家を地域資源として地域活性化を目指す

氏名	所在	分野
中島 浩司 さん	島根県大田市	建築



### 【活動の概要】

大田市に移り住み生活したいと希望する他地域の人に空き家を提供する空き家バンク活動を行政と一緒に推進。また古民家再生に取り組み、域内にある古民家を改修して住みたい域外の人に情報発信を行う。さらに域内出身者だが都会に居住し帰省できず自宅が空き家になっている人向けに、空き家管理を行う活動を行っている。

### 【青年海外協力隊での活動】

中島浩司さんは、大学卒業後東京で建設会社に就職。実家は工務店を営んでいた。

叔母がアメリカに移住した影響で、海外移住を希望していた。JICAの前身、国際協力事業団が中南米の日系人社会の支援を目的に行っていた「海外開発青年」に参加したいと希望していた。これに参加できれば3年間の派遣後、希望により先方に移住が可能な仕組みだった。ただこの時期、希望分野での要請がなかった



ガーナでの活動の様子

ため、そのときに備えて海外の経験を積むことを目的に協力隊に参加。就職後2年目の1987年4月～1989年6月までガーナの首都から北方800kmの内陸に位置する第3の都市タマレに赴任した。

公共建築専門のガーナ建設公社の支店に配属されシニアスタッフとなり、施工の仕方、工事運営の仕方などを担う職長を養成する役目を担った。工期の概念がなく、資材も届かないことがざらで、技術的な遅れもあった。工事の精度を高めることができるようマニュアルを作った。日本の物差しを押し付けることは避けようと努めたが、自分がいなくなって元に戻ることも意味のないことだというジレンマを感じることもたびたびあった。

その一方で自らの置かれた環境の中で生きようとする人々のおおらかさや、人間の生きる原点を教えられるとともに、海外で生活するすべや言葉の違いを克服できるすべを得た。

### 【地域での活動を始めた経緯】

帰国翌年から「海外開発青年」に参加しようと派遣前研修までこぎつけたが、事情が変わり参加を辞退した。家業の工務店を引き継ぐ必要も出てきたことから、移住をあきらめUターン就業した。希望がかなわなかったショックが大きく、また島根の田舎から抜け出せなくなるという思い込みもあったため、仕事も手に付かず2～3年の間は元気がない状況が続いた。しかしその間は1級建築士や宅地建物取引士などの資格を取ることに関心を注いだ。

宅地建物取引士の資格取得後土地建物の取引が可能となり、建築と土地を合わせた仕事を手掛けるうちに、都会から地方への移住希望があることに気付き、域内で増えていた空き家と移住希望者とをつなぐことができれば、都会から地方へ人を呼び込むことができるのではないかと思い始めた。その

後大田市が空き家バンクを始める一方、自分は島根県宅地建物取引業協会大田宅建センターのセンター長となったため、その立場から行政とも連携を進めている。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

現在連携しているのは大田市と島根県であり、大田市の定住PRサイト「どがどが」では、大田市と大田宅建センターとがタイアップし、空き家バンクに結びつけている。また島根県が運営するU Iターナー希望者向けの住宅相談窓口サイト「ゆーあいしまね」では、自分が大田地区の相談員になっている。空き家のマッチング活動は行政との連携で行う一方で、自社のサイト内でも進めている。



都会からは田舎に住居だけを求める退職者もあれば、空き家を利用した仕事を始めたり、域内の仕事に就いて移り住む人も出てきた。退職者には古民家に住みたいとの希望も多く、古民家改修事業も進めている。そこでは全国組織の日本民家再生協会とも連携しているほか、市内外の建築関係者と情報交換やイベントなどを行っている。



建築作業の様子

今後の取り組みでは、空き家を持ちながら帰省が困難な域内出身者に代わって空き家管理を行う事業を進めたいと考えている。それはゆくゆく販売依頼物件として任せられることにもつながってくる。

### 【地域と世界を結ぶ視点】

人間関係づくりでは相手が難しい人かやさしい人か、どんな人柄なのかを見極める力がついた。現在の仕事では特定地域以外の人とも関わるため、どんな人と会うか分からない。初めて会った人の人柄はそのときすぐ分かるが、印象や関係性が悪いと気付くこともある。そんな人とどう接するかという対応力は協力隊の経験で培えた。基本は人対人なので外国人も日本人も一緒。また生きるか死ぬかの状況に立たされることもあったので、困難を乗り越える問題解決能力が身についたり、それが今に生きている。

今後の事業は外国人を雇って進めることがあるかもしれないが、そんなときには自分が中心になって、彼らとのコミュニケーションをとっていきたい。

協力隊OVとの連携もあり、顧客にOVがいるほか、新たに設計事務所を始めるOVが加わった折には、一緒になって顧客OVの依頼に対応することができた。そうした関連分野以外にも、今後は空き家の耕作放棄地の利用などの分野で農業関係のOVとの連携もできるかもしれない。こうした協力隊としての共通の経験を基にしたつながりは強く、貴重な財産となっている。

古民家を扱い始めたころ、県内で独自の古民家研究会を立ち上げた。そこで大田市内の古民家をフランスに移築する計画が持ちかけられ現地事前調査まで携わった。最終的にそのプロジェクトは実現できなかったが、同様に日本古民家の海外移築需要は国によってはもっとある。日本建築の繊細さが海外で評価されることが多くなっている。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

協力隊だったときは華だったが、帰任後は燃え尽きたようになることもあった。しかしその後地方

創生、地域活性化に興味を持ち活動をする中で、協力隊から帰ってきてからが本番だと感じる。帰国後に何をしたいかを見越し、どういうスキルを身につけておけばよいかを考えることが大切だ。

今は地方が主役であり、面白い時代なので協力隊の経験を活かせるチャンスが多い。ただ協力隊のときはよく来てくれた「お客さん」として接してくれたが、日本では関係は対等であるうえに、「本音と建前」があるので難しさがあるかもしれない。だが協力隊で培ったコミュニケーション力はそこでも活かせるだろう。地方（田舎）は、これからやるべきことであふれている。

## 地方の自然を活かした農業と特産品開発

氏名	所在	分野
塩飽 康利 さん	岡山県井原市	農業



### 【活動の概要】

耕作放棄地を借り受けて農園を運営。新たに開発するのではなく、自然を活かし、昔は当たり前に使われていた素材やそこにあるものを使って進める農業を実践している。また、まちづくりの中で、地域の協力者とともにアイデアを出しながら、実ったものを使って特産品開発も行っている。

### 【青年海外協力隊での活動】

塩飽康利さんは、小学校の授業で日本の技術者が海外で運河の建設に協力する話を聞き、大きくなったら海外で仕事をしたいと思った。建設会社就職後協力隊のことをテレビで見て自分の夢を思い出し、6年間働いた後、夢をかなえるため3回応募した末に協力隊員となった。



エチオピアでの活動の様子

最初は重機械を使う建設機械の分野で応募したがかなわなかった。その後OVから建設機械では操縦だけでなく整備も伴うため、免許を持っていないなら要望が多い農業関係で応募してはとアドバイスされ、実家が農家だったこともあり、希望に近い分野の農業土木で応募した。

1986年～1988年、エチオピアのアジスアベバへ派遣され、農業省利水開発局に赴任し、地方へ出張して活動。池・水路・灌漑設備の建設に関する農業土木の指導に携わった。カウンターパートと一緒に電気・ガス・水道のない地域に出向き、農地を作るところから関わった。当初出向いた地では長老に畑がどこにあるかを尋ねると、「種を蒔いて生えてくるところが畑だ」と言われることもあった。そんな土地で測量をして水源から水を引くルートを計画した。飢餓が続いていたほか、言葉が伝わらないので絵で伝えたり、計画の概念がなく何年で仕上げるかを尋ねても「アフリカには時間は一杯ある」と言われたりと、様々な困難に遭遇した。

自分の指導がうまく伝わったかどうか自信はないが、土木機械がないところでは、簡単な道具を使い人海戦術で進めなければならないこともあり、機械を使う技術を伝えるよりも、逆にあるものを利用してできる方法を教わった。

### 【地域での活動を始めた経緯】

帰国後井原市の実家に戻ったが、田舎にいても海外に行けるチャンスがあると思い、隣の福山市にある半導体関連の会社に技術担当者として入社した。

その一方で家にある田畑を活かそうと思い、兼業で農園を始めた。地域内では高齢化が進んだため後継者がいなくなり、耕作放棄地が増えてきていたので、そうした農家に頼んで農地を借りて規模を拡大しながら、米、野菜、栗、葡萄など20種類以上を栽培した。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

エチオピアでも昔の日本でも、収穫後はよいものを残し、そこから種を採って次の年にも植えるようにしていたが、今の日本では操作された1代で終わる種を買ってきて植えて収穫するだけになっている。しかし農園ではエチオピアでの体験をもとに、開発するのでなく自然を活かし、金をかけずにあるものを使って進める農業を実践している。そこでは、ヨモギやスギナなど昔使っていたが、今では雑草扱いされているものの利用も試みている。



農園での活動の様子

まちづくりの一環として井原市の交付金を使って、地元の人とともに農園の収穫物をもとにした特産品づくり事業、「いきいき菜園事業」に取り組むほか、自らもオリジナル産品づくりを行い、農園内やウェブサイトを通じて販売している。



学校での講演の様子

また農園には就農体験のための高校生のインターンシップを受け入れ、働く場としての農業に対する関心を若い人たちに呼び起こしている。

さらに岡山県は2004年に都道府県で国内初の国際貢献推進条例を制定し、国内外の救助活動に協力する「ももたろう国際救助隊」を組織したが、そこにもメンバーとして加わり、東日本大震災の被災地支援などに参加している。

### 【地域と世界を結ぶ視点】

日本にいただけでは会えないような人にも会えるのが協力隊。人との出会いは奇跡であるとも言えるし、そうした人たちと一緒に生活ができるので、その経験が後の人生に大きく影響する。そこではコミュニケーションが最も重要であり、どこに行っても無言でいてはだれも自分の存在を認識してくれないので、自分から笑顔であいさつすることが基本となる。

また自分のことは自分でしないと解決できないし、困難を経験することも必要であり、それを乗り越えるために考えることや人と交渉することが、問題解決力を身につけることにもつながる。そしてそれはその後の生きる糧となる。

さらに国内では飢餓を経験することがないので、そうした経験がある協力隊経験者は、自然災害が起きても対処できる。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

地方では好きなことができる。人が少なくなっているので、迎えてもらえる環境があり、行政も農業の担い手を募集している。まちによっては、移住すれば農業をするための土地を農家が貸してくれるところもある。

農村地域で暮らすメリットは、パソコンに使われるような生活でなく、四季の流れで季節を感じる生活ができること。そうした環境がある地方では、自然を活かした農業ができるとともに、都会よりも様々なつながりを周りの人々と築くことができる。特に岡山県は台風をはじめとして自然災害が少ないので、農業するには向いた地域であるし、他地域の人も移住しやすい。

今は海外で見聞きしてきたことや、取り入れられるやり方を活かしている。それができるのも協力隊での経験によるところが大きいので、今後協力隊に参加しようとする人には、いろいろな経験をしてほしいし、それを帰国後にも活かしてほしい。

## 岡山を拠点にラオスの丘陵地帯の農業振興をサポート

氏名	所在	分野
小林 勉 さん	岡山県岡山市	農業、海外農村支援



### 【活動の概要】

NGO のアジア農村協力ネットワーク岡山を設立し、ラオスの丘陵地帯で果樹栽培および販路確保等の指導を行い、農村地域の経済的な自立と自然環境保全の両立を目指す。

### 【青年海外協力隊での活動】

小林勉さんは、中学生のときに読んだ「飢えて滅んだ国 ビアフラ」という本に影響を受け、実家が農業を営んでいたこともあり、「こんな国があるんだったら自分たちでも何かできることはあるんじゃないか」との思いを抱いた。大学は水産学部に進み卒業後、せっかく勉強したことを、少しは生かした活動をしたいとの思いや、若いうちに色々な国を見ておきたいとの考えもあり、青年海外協力隊に応募した。

派遣国はバングラデシュ（1987年度3次隊）で、水産局の淡水魚養殖に使う種苗生産の養殖場に配属された。そこで、親魚から卵をとり、孵化させて稚魚を生産し、それを周辺の住民に販売して、住民の蛋白源である淡水魚をもっと広めようというプロジェクトを担った。しかし、歴史的な規模の洪水の発生により、地域そのものが流出してしまうような甚大な被害に遭遇し、養殖に関する取り組みができなくなるなどの困難に直面しながら、バングラデシュの自然の河川における基礎生産量を調査するなどの取り組みを行った。

小林さんにとって青年海外協力隊で得られた経験で一番大きな収穫は、常識というのは世界各国、経験や学習、宗教などでいくらでも変化するということだった。帰国後は、常識という枠にとらわれない考え方ができるようになったと考えている。

### 【地域での活動を始めた経緯】

帰国後は、農業に従事しながら、ネパールやインドシナ半島での海外支援の活動を継続していた。その活動のメンバーの中に青年海外協力隊でラオスに赴任し森林経営に取り組んでいた人がおり、継続的な活動への協力を求められたことから、NGO のアジア農村協力ネットワーク岡山を設立し、ラオス北部ルアンナムター県で果樹の植栽などに取り組んでいる。丘陵地帯のラオスは、小林さんが青年海外協力隊として派遣された低湿な地域のバングラデシュとは、異なる気候風土であったことも面白みを感じた。

なお、アジア農村協力ネットワーク岡山の開始時期には、香川大学を退官された先生が参加され、インドシナ半島付近での発酵食品への興味が重なったこともあり、意気投合し、海外での調査方法等を学ぶ機会があり、活動がより充実することとなった。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

アジア農村協力ネットワーク岡山のラオス・ルアンナムター県の丘陵地域での活動は、15年前から

スタートし、6村を対象に活動を行っている。ここでは、現地の人に果樹の栽培技術を理解してもらうとともに、活動を継続してもらうため、現地の農林局職員に技術移転を行い、NGOが引き上げた後でも、同じように発展的に農業支援ができるようにすることである。

農家への技術移転は、キーパーソンとなる篤農家を毎年3名選び、彼らに集中的に支援を行っていくことで、このキーパーソンが指導者となり、村に広くその農業手法が普及していくこと、効率よく販売し収益を上げる青果出荷、加工品の製造販売も取り組んでいけることが最終的な目標となっている。

小林さんは、ルアンナムターを含むラオス北部のすばらしい自然環境を維持していくため、村民自身が自然を誇りとし、環境保全型の農業を考え拡大していくことを目指している。そして、収益を上げることで出稼ぎをなくし、伝統的な生活を維持し、無秩序な山焼きをしないようにすることで、地域を盛り上げて欲しいと考えている。

現在では、活動当初の15年前に植えた果樹で収穫が始まっており、今後、次々に収穫・販売が始まる予定であり、その成果を見てほかの村民にも広く普及することを強く希望している。

なお、活動を開始した当初は、村へのアクセスも困難だったが、現在は道路もよくなり、収穫物の販売も容易になりつつある。一部に、農業よりも市街地で働くことを選んだ村民もいるが、ビレッジステイやエコツーリズムなど観光産業にかかわる村民も出てきており、人の往来が多くなったことで、旬の果物を観光客に販売するチャンスも増えるなどの農業の可能性を広めることにもつながりビジネスチャンスをもたらしてくれることも期待している。

また、村で果樹苗も育成しており、果実とともに育成した果樹苗も販売できるようになれば、果樹農業の可能性はどんどん広がることと考えている。



ラオスでの活動の様子

### 【地域と世界を結ぶ視点】

果樹関係の仕事は、活動が長期にわたる。種をまいて、翌年植え替え、その次の年には接木、その翌年、果樹苗として利用できるようになる。植えてから3年目に少し果実を成らせて品種を確認し、その翌年から、少しずつ収穫が始まる。文章で書けば2,3行のことだが、種まきから実がなるまで5,6年を要す。こういう息の長い活動はじっくり人づくりからはじめなければならない。もともとはメンバーの活動場所ではあったが、関係作りからはじめることは面白いと感じる。こういう活動は、地域が世界と結びつくためのとても大切な一歩になるものだと思う。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

協力隊に参加しても、地方都市では、なかなかその経験を生かすことは難しいと思います。多くの帰国隊員が都市部に生活拠点を求めることは致し方ないかと思います。しかし経験を生かすのは、帰国後の自分の生活に活かせばよい。地方での生活では、人間関係の構築などは間違いなく協力隊の経験が役立つでしょうし、疲弊してきている地方の農村などで、村おこし事業などにも参画していくことも考えられる。それで生計を立てていくことは難しいかもしれないが、協力隊の経験を地域の活動に生かすことは、やり甲斐のあることだと思います。

そうはいつでも、なかなか生活できるだけの収入に結びつけることは難しいと思うので、地方の行政機関などが、帰国隊員をうまく活用してくれるようなシステムの構築を考えていただくことも必要かと思う。

## 震災復興の経験を地域の災害時に活かし、継続的な支援を展開

氏名	所在	分野
細川 光宜 さん	広島県広島市	被災地復興



### 【活動の概要】

東日本大震災での復興支援活動に参加した経験を活かし、2014年8月に起きた広島市での土砂災害の復興支援のためのボランティアセンターの立ち上げ・運営を担い、継続的な地域復興の支援に携わる。

### 【青年海外協力隊での活動】

細川光宜さんは、大学では社会福祉を専攻し、卒業後、社会福祉施設で勤めていたが退職し、ハローワークで木工技術を学んだ。27歳のときに街角で青年海外協力隊を募集するポスターを見て関心があり、応募した。

派遣先を希望することもできるが、特に希望はしなかった。派遣先はパプアニューギニアの州都メンディという小さな町で、町の中心を少し離れると電気がこない所であった。原始時代の生活がすぐ近くで営まれているという感じである。

職業訓練校の木工コースで、地元の人と2人一組となって机や椅子といった家具づくりを教えた。新規で派遣された隊員であったので、生徒の募集から始めた。最初の年は生徒が2人であったが、最後の4年目には大幅に増加し、20人に教えた。



パプアニューギニアでの活動の様子

### 【地域での活動を始めた経緯】

帰国後、実家のある福山市で暮らしていたが、2011年3月11日に東日本大震災が発生した。1週間後には日本海側を回って宮城県石巻市に入り、その後は気仙沼市に移った。現地で同年11月まで公民館等に泊まりながら、がれきの撤去やボランティアセンターの立ち上げ等のボランティア活動に参加した。

がれきの撤去に目途が立ったこともあり、実家のある福山市に帰ったが、その後も定期的に訪問し、かきのいかだづくりの漁業復興支援等を行った。広島からはいかだの材料等を気仙沼市に持っていき、帰りには海産物を持って帰り支援の物産展を開催した。



気仙沼での復興支援の様子

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

2014年8月20日に広島市で土砂災害が発生した。翌日に社会福祉協議会関係者を通して、東日本大震災での経験を広島市のボランティアセンターで活かしてほしいと連絡があり、ボランティアの派遣先を調整する仕事を担当した。

同年12月にセンターが解散した後は、被災した阿武の里団地の復興支援に携わった。2015年4月

末からは、団地内で被災住宅が解体され空き地が増加するため、宅地の所有者の許可を得て住民やボランティアと一緒に、土地を耕してマリーゴールドや百日草を植える活動を進めている。

直接的には阿武の里団地の住民が幸せになることを願っている。

花の世話を通して住民同士の会話が増え、団地に笑顔が広がってほしい。



阿武の里団地の復興支援の様子

#### 【地域と世界を結ぶ視点】

当地の復興支援についても多数の青年海外協力隊OVに協力いただいた。

個人的にも青年海外協力隊で貴重な経験をさせていただいたことに大変感謝しており、協力隊の精神に則って、その経験を日本でも活かしたいと考えている。

ボランティア活動の意欲は持っているが、どうしたらよいかわからず躊躇する人も多いと思うので、そういう人をボランティア活動に導く活動を続けたい。

#### 【帰国後の地方定住のススメ】

青年海外協力隊の広島県OB会も活発に活動している。これは海外に派遣されて良かったと感じる青年海外協力隊OVが多いので、OB会活動にも積極的なのである。

帰国後も交流が続いていることも、青年海外協力隊が個々人の人生にも有益である証といえると思います。

## 地方都市でフェアトレードと外国人の生活支援の展開で地域と海外をつなぐ

氏名	所在	分野
羽熊 広大 さん	広島県広島市	農業



### 【活動の概要】

リース農園運営会社で勤務しつつ、地元の休耕田や里山資源を活用し、栽培した農産物の販売、農園レストランの運営、各種イベントの開催を通じて、吉山地区の活性化を目指す。

### 【青年海外協力隊での活動】

羽熊広大さんは、食品加工に興味があり大学に入学した。入学した大学には、戦前には農業従事者として海外に移住する者を輩出した伝統があり、また最近では青年海外協力隊に参加するOBも多かった。

大学卒業後は、ワーキングホリデーを利用して、オーストラリアの伯父の元で料理を修業していた。青年会海外協力隊の募集を知り、大学で学んだ知識と農業や食品加工に関する知識を活かしたい、さらに海外での経験をつみたいと考えた。

派遣されたのは中米のグアテマラである。内戦は終了していたが、まだまだ発展途上で治安もあまり良くない状態であった。コーヒーが主生産物の農業国である。首都から6時間の距離にある地方都市で、現地の菓子職人と2人でチームを組み、職業訓練校で農業指導を行った。

日本のハローワークで行うような比較的短期間の2～3か月の職業訓練やカルチャースクール的な活動を行っていた。1クラス20人程度で、パンやジャムづくりを指導した。途中からは日本料理を指導してもらいたいとの要望を受けて、うどん、てんぷら、すしづくりを指導した。

当然、食文化も違うので、しょうゆ、みそ、みりんも簡単には手に入らない。食品加工の知識は大学で得ていたが、試行錯誤しながらしょうゆ等を自家製でつくった。

### 【地域での活動を始めた経緯】

青年海外協力隊の終了後は日本の農業高校で臨時教員も経験したが、主には農業アドバイザーとして海外NGOや海外コンサルタント会社で活動してきた。

作物は品種が違えば当然のことながら、土壌が違って全く別物になる。一通りの知識は持っていたが実際の農業経験がないため、コンサルタント業に限界を感じ始めていた。やはり場所を確保して自分で作物を生産する必要があると考えた。今は実家にも小さい農園があるし、近隣に畑を借りて、会社の農園とあわせて3か所で野菜等を栽培している。

また子供が生まれ、家族にも日本に落ち着きたい気持ちも出てきて、故郷である広島を拠点にしようと考えた。国内では広島しか考えていなかった。現在の会社が実際に農園を持ち、地域活性化に取り組んでいたことが縁となった。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

吉山地区の里山資源の活用をした地域活性化を目指している。

荒廃していた休耕田を開拓して土づくりに3年をかけて、やっと野菜がつかれるようになった。地元の農家からアドバイスをもらい、道具を借り、まさに協力隊でやってきたことを日本で再現している。

街中の人には、気軽に野菜栽培ができるリース農園を提供している。技術指導料はいただくが、収穫した野菜等は自宅で食べてもらう。

自社農園や地域の農家で栽培した米や野菜を食材とする農園レストランを運営しながら、吉山地区のブランド化、地域の活性化を目指している。

農園レストランの開業から2年半が経過し、また地域の祭や地域清掃活動にも参加し、地域の信頼を得てきた。

この地域の農家も高齢化は進んでいるが、パエリア専用米のパエリコやズッキーニを紹介すると栽培に乗り出す農家があるなど、米以外の新しい作物を生産しようという意欲にあふれている。

生産したバジルを材料として、メーカーとコラボしてドレッシングを生産し、市内のデパートでも販売している。

広島市やJA等と連携して近くに産直市場をつくる準備を進めており、地産地消ならぬ地産地「活」の一助となるよう今後もがんばりたい。



マルシェ出店の様子



地域での米の収穫の様子

### 【地域と世界を結ぶ視点】

国によって文化に当然違いがあるので、戸惑うことは多いと思うが、根本である人の営みは海外でも日本でも同じである。

地域活動を円滑に進めるには、コミュニティーに入り、地域の人々と協働しながらコツコツと仕事することが大切であるが、まさにグアテマラでの体験と同じである。

現在、自社農園で作物をつくるに当たっては、農具がそろわないグアテマラで工夫した習慣が役立っている。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

日本の地方、それも里山が面白い。

地方の中小企業には青年海外協力隊の経験や個性を活かせる場所がたくさんあると思う。

## 協力隊での経験を活かし、地域と行政の橋渡し役として地域力を発掘

氏名	所在	分野
唐井 ゆかり さん	広島県三原市	地域おこし協力隊



### 【活動の概要】

三原市の地域おこし協力隊として、大和町に居住し、農事組合法人での農業と地域における各種イベントの企画・運営をサポートしながら、地域と行政の橋渡し役をにないつつ、地域の活力の掘り起しに取り組む。

### 【青年海外協力隊での活動】

唐井ゆかりさん（広島県出身）は、小学生高学年の時にマザー・テレサやガンジー、キング牧師などの伝記を読み、見返りを求めない活動の重要性を感じ、将来、社会貢献や国際貢献に係わる活動をしたいとの思いを抱いた。その後、高校生時代にその思いは、海外での国際貢献活動に携わりたいとの具体的なものとなり、高校卒業を期に、海外留学に向けた専門学校に進んだ。進学後の2年次からはアメリカに留学し、国際学や社会学を学びつつ、長期休暇を利用して中米でのボランティア活動に参加するなど、子どものころの夢を実現するためのステップを登っていった。

米国留学から帰国し、国際協力関係の NGO・NPO への就職を目指してセミナー等に参加している中で、青年海外協力隊の募集を目にし、力試しも兼ねて、留学時代に学んだエイズ対策の知識を活かし、アフリカ地域での活動を希望して応募し、採用された。

任地は希望通り、アフリカ地域のガーナ共和国で、現地の民間 NGO に派遣された。現地では具体的な役割が与えられない状況が続き、当初は地域におけるエイズ対策の取り組みに係われない状況が続いたが、インターンとして NGO を訪れる学生等の引率を任されてからは、そのインターン生と議論しながら、その時点でできる取り組みとして現地の学校などでのエイズ予防などの講座を開くなどの取り組みを行った。また、前任者が現地の特産であるビーズアクセサリーの製作指導・販売などを行っていたものを引き継ぐことで、NGO や現地住民の収入の確保などにも役立つ取り組みを行うことができ、一定の達成感が得られた。



ガーナでの活動の様子

### 【地域での活動を始めた経緯】

ガーナ共和国に派遣されていた期間に、日本では東日本大震災が起こった。その際、現地の人から日本について尋ねられる機会が増えたが、その質問に対し、うまく答えられず、日本について自分がよく知らないことに気づかされた。また、その時期、現地での活動への限界も感じながら、地域の課題解決は現地の人ができることにより、力が出てくるのでは感じたことから、自分自身も一旦帰国し、日本人として日本で活動すべきではないかと考え、帰国して日本で活動することを選択した。

帰国後、新たな活動の場所を求めて様々な資料に当たっているときに地域おこし協力隊の募集が各

地で行われていることを知った。ただし、その時点では、自分自身が活動すべき地域がどこか決めかねていた。そんな中で、地元の広島県三原市が地域おこし協力隊を募集していることを知り、自分の中で納得できる活動の場だと感じ、今やっておかなければ次のチャンスはないかも、との思いから応募したところ、見事採用された。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

現在の地域おこし協力隊としての活動は、三原市の北西部にある大和町において、農事組合法人での農業従事と住民自治組織が行うイベント、まちづくり活動の運営・企画などである。

地域おこし協力隊の委嘱を受けてからは、大和町での活動の拠点である農事組合法人むくなしの所在地区で空き家を借りて定住しながら、農作業中心の活動が中心であったが、農事組合法人のメンバーと打ち解けるにつれ、その人の紹介などにより、地域の人からの認知度も上がり、様々な活動への協力を求められるようになるなど、地域活性化の活動に関わる機会も増加している。地域おこし協力隊は、地域の受け入れ体制が重要となるが、大和町では農事組合法人の組合員などのフォローもあり、スムーズに地域になじむことができている。また、昨年度より、大和支所に地元出身者の集落支援員が配置されたことにより、その人を通じたより広い範囲での人的ネットワークの形成が進んでいる。

現在では、三原市内に新たにもう一名地域おこし協力隊の隊員が増えたこともあり、活動のノウハウを共有しながら、より円滑な活動のために協力関係を形成している。さらに、広島県内では青年海外協力隊 OV の地域おこし協力隊員が増えてきており、さらにネットワークの拡大を図っていくことを目指している。

地域おこし協力隊としての活動の成果は、地域と行政の橋渡し役となり、地域のニーズを行政に伝え、行政において支援できる内容を地域に伝えながら、地域での活動の実現可能性を高める役割を担っている点にある。また、地域における活動を大きく変えるのではなく、住民自らが少しでも改善できるように支援し、自ら活動してもらえらるきっかけを与えるような取り組みも行っている。こうした取り組みは青年海外協力隊で現地の人たちに提案し、少しでも地域の改善を引き出してきた経験が活かされている。このように、地域における課題解決は日本でも海外でも共通する部分が多いことから、青年海外協力隊 OV は地域おこし協力隊との親和性は高いと感じている。



三原市大和町における地域おこし協力隊としての活動状況

### 【地域と世界を結ぶ視点】

唐井さんは、青年海外協力隊で活動している間に、海外の人たちが、日本の強さ、先進性などを高く評価し、日本のような活動を行いたいとの思いを持っていることを体感した。一方で日本人がどの

ような貢献活動を現地で行っても、なかなか現地の人から評価されないという状況があった。こうした状況は、日本で地域課題解決に関する先進的な取り組みを行えば、海外から注目してもらえ、それが海外への貢献につながる場合もあるということを経験した。その意味で、日本で活動することでも、国際貢献につながるということに思い至った。そして、大都市圏で活動するよりも地方で活動するほうが、海外の地域状況と類似性が高く、注目してもらえる環境がある。こうした状況を活かし、地方での活動を国内外に発信することも重要だと考えている。

#### 【帰国後の地方定住のススメ】

青年海外協力隊は、全く知らない人の中で活動する経験ができる。また、海外から来た人間としてある種のフィルターが掛かり、一定の距離感を持ちながらその地域の人たちと関わるができる。これは、日本に帰って地域で活動する場合にも役立つものである。青年海外協力隊を経験した後に地域おこし協力隊として活動する場合は、その経験を活かし、地域の人と深くかかわる部分と、一歩引いて自分のスタンスを守りながら支援に徹する部分などをうまく使い分けることができるようになる。

青年海外協力隊は、個々の専門性で貢献するだけでなく、日本人として伝えられること（文化や歴史背景など）を現地の人々に伝えることでも国際貢献を果たすことができる。そして帰国後、日本でその経験を還元することも重要とされている。海外で得た経験は日本国内に住み続けている人とは異なった視点を得られることもあるため、その特殊性を活かして地域に関わっていくことを多くのOVに期待したい。

## 地域での災害医療支援活動の推進

氏名	所在	分野
藤村 美都子 さん	山口県宇部市	医療



### 【活動の概要】

病院に看護師として勤務する傍ら、大規模災害発生時などの現場で活動する専門医療チーム「D-MAT」にメンバーとして参加。大災害を想定した訓練を中心に地域内での災害支援活動の一端を担う一方で、医療支援活動の第一人者として、院内でも災害に向けた環境づくりを模索している。

### 【青年海外協力隊での活動】

藤村美都子さんは、高校生のとき農業でフィリピンに赴任したOVの出前講座を聞いたことをきっかけに、海外で活躍したいと思った。医療短大卒業後、病院勤務、米国留学を経て、世界的に活動する医療NGOへの参加を模索する中で海外経験を積む必要性を知り、青年海外協力隊に応募。2001年～2003年の間、中国湖北省武漢市から車で2時間の黄石市に赴任。市内の「中心病院」で呼吸器・消化器病棟に勤務し、看護部長と一緒に「患者中心の看護」に関する技術移転を模索した。

医療制度と医療看護に対する考え方が日本と異なり、看護料が内容ごとに別請求となっていた。そのため院内でも看護師は患者にあまり手を出さず、身内が看護するのが一般的で、自らが見本を示すことしかできず、勉強会を計画しても理解者を通じた働きかけではうまくいかなかった。

院内関係者とは信頼関係を築けていたが、組織活動はトップダウンでなければ進まなかった。そこから問題解決のためには特定のものだけを変えようとするのではなく、「全体構造の中に入れて込んで変える」ように行動する必要があることを知った。そして改善したいと思うことは、指揮命令系統に載せ手順を踏んで進めていった。このやり方は世界各地の医療機関で共通であり、その後に医療組織内で活動する中で活かされている。



中国での活動の様子

### 【地域での活動を始めた経緯】

帰任後、協力隊経験者を国連ボランティアとして送り出す枠組みで、コソボ復興暫定行政機関であるUNMIK（国際連合コソボ暫定行政ミッション）に2007年に派遣され、国連の職員を対象とする医療機関で専属看護師となった。そこでは宗教・人種・民族の違う人々に対する様々な医療を体験できた。

2008年には医療NGO「世界の医療団」から声がかかり、南スーダンの山村の診療所に看護師として派遣されが、隣国で日本人女性医師が誘拐される事件が発生。村に溶け込んだ活動をしていたため、外出禁止の医療団通達に反して行動したことから3か月で退任を強いられた。だが帰国前にパリの本部で面接を受けたとき、「今回起こったことを振り返り、それを昇華してまた戻ってきてほしい」と言われた。そして自分に何が必要かを考え、帰国後は指導力を高めるため大学で教員になった。その後さらに現場経験を積むため地元の民間総合病院で看護師となり、病院として組織した災害派遣医療チームD-MATの活動に加わった。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

東日本大震災でのD-MATの活躍を機に、勤務先の総合病院もD-MATチームを作ることとなり、海外での活動経験がある自分もメンバーに選ばれた。勤務の傍ら地域の山口D-MATのメンバーとして年2～3回の総合訓練を消防・警察・自衛隊などとともに実施するなどの地域内活動を行っている。

現在院内でも地域でもまだD-MATの活動内容が周知されていない。また重大事故が発生し負傷者が大勢出た場合、勤務先の総合病院にも搬送されることになるが、重症患者が3人来ると設備・人員の点から救急外来が回らなくなるため、それを想定した訓練を行う必要性を院内D-MATメンバーで共通課題としている。

地域連携では、飛行機墜落時を想定した訓練を重ねる地区がD-MATブースを作ってくれた。また2015年7月には山口で、3万人が参加するボーイスカウトの世界的な集会「世界スカウトジャンボリー」が開催される。そこでは難民キャンプを想定して救護所が開設され、D-MATメンバーとして自分も医師と共に派遣される。また院内では災害派遣ナースとして登録している看護師が講師となり、災害看護研修をシリーズで行うようになり、災害対応意識が高まっている。こうした機会を捉えて災害支援の環境づくりを進め、院内にD-MATチームもう一つ組織するよう働きかけたい。



D-MATの訓練の様子

### 【地域と世界を結ぶ視点】

協力隊の経験で役立っていることは、自分のやりたいことと組織の意向を擦り合わせるにはトップダウンを意識して動くこと。そばにいる同僚とは情報共有化できるが、何かを進めるためには個人的なつながりではなく、メンバーの上に立つ人を通じて意向が伝わるよう仕向けなければならない。

国籍や人種が違って医療はそんなに違わないし、医療関係者同士は共感できるものがある。コンゴでの経験から医療者である自分に安心して身を委ね、身の周りから武器を外す軍人を目の当たりにして、医療者は世界どこでも人々の信頼を得られると感じた。医療者として派遣される人は自信を持って行ってほしい。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

医療者は地方でも信頼される存在となれる。地域活動は必ずしもトップダウンではない。そこには必ずキーマンとなる実践者がいるので、その人の信頼を得ることができれば、行動的に動けるようになる。

専門能力はもちろん必要だが、海外で人々に受け入れてもらうためのコツと国内の地方の人に受け入れられるコツは共通であり、その基本はあいさつ。また、名前を覚えることも大切で、それによって関係づくりが円滑に進む。

帰国後もちょっとしたことはOVに頼むことができる。自分の苦手な活動分野があるとしても、OVの中には得意な人がいるので、地方に戻っても協力してもらえる仲間がいる。

これから協力隊に参加する人には、できることを増やして派遣されるようにしてほしい。自分にはできないことが多いので、行った先ではそばにいた人に相談し一緒になって考えていた。皆よいアイデアを持っており教えられることが多かった。そうした経験も帰国後には活かされる。

## 地方都市で外国人の生活支援の展開とフェアトレードで地域と海外をつなぐ

氏名	所在	分野
松浦 和子 さん	山口県防府市	多文化共生、市民活動支援、フェアトレード



### 【活動の概要】

防府市民活動支援センターのスタッフとして市民活動やボランティアの支援を行いながら、多文化共生の地域づくりを目指す「ほうふグローバルネット」で在住外国人支援を展開。2014年にはフェアトレード雑貨&カフェ「Souq」をオープンし、海外（外国人）と地域をつなぐ窓口的な役割を担う。

### 【青年海外協力隊での活動】

松浦和子さんは、看護系の高校に進学し、短大で看護師、専門学校で保健師の資格を取得し、地元である山口県防府市役所に保健師として就職した。海外への思いは、学生時代にテレビなどで流れる海外の難民キャンプ等の報道に触れたのがきっかけで、いつかはそういった場で自分も活動したいとの思いを抱いていた。

就職後は、保健師としての仕事を通じて経験を積みながらも、海外での活動の夢を実現するため、青年海外協力隊に参加した。なお、当時は青年海外協力隊への在職参加制度がなかったことから、市役所を退職しての参加となった。

青年海外協力隊での派遣先はヨルダンの地方都市で、現地の保健センターへ配属され、主には妊産婦、乳幼児を持つ母親への保健指導を行った。

現地での活動は、派遣前に描いていたような内容とはならない中で、現地の人など、様々な人の支援があって生活、活動が成り立っていくことを実感し、その重要性を認識することとなった。



ヨルダンでの活動の様子

### 【地域での活動を始めた経緯】

帰国後は、青年海外協力隊での活動の振り返りや将来を考えつつOV会などに参加する中で、山口県協力隊を育てる会のメンバーである防府市民活動支援センターの職員の方からスタッフ募集の情報を得て、応募し、同組織スタッフとして採用され、新たな分野への挑戦が始まった。

なお、山口県では、2か月に一回、OVの懇親会が開かれており、参加者は70代から帰国直後の20代の人まで幅広く、様々な分野の人たちが共通の経験を語り合うことで、ネットワークが広がり、それぞれの活動を直接的・間接的に支援する関係が構築されている。こうした地域のネットワークは、帰国後の協力隊OVの一助となっているものと考えられる。

### 【現在の取り組みの特徴と効果】

帰国後、地域をみると、技能実習生を中心に市内で生活する外国人が増えている中で、外国人の方々が地域とつながる場面の少なさに気づき、在住外国人が地域の中でつながりをもって安心して暮らせる多文化共生の地域づくりを目指す、「ほうふグローバルネット」を2012年8月に設立した。

ここでは、在住外国人が地域で抱えている課題の把握や解決に向けた取り組み、日本人との交流の場の提供国際的な課題についての勉強会などを行っている。

また、フェアトレードネットワークにも参加し、ほうふグローバルネットの活動資金確保も兼ねて各種イベントでフェアトレード商品の物販を行っていた。これらの取り組みを連動させるため、いつでもフェアトレード商品が購入できる場かつ交流の場にもなる施設として、2014年11月にフェアトレード雑貨&カフェ「Souq (スーク)」をJR防府駅前にオープンした。

今後、在住外国人の課題解決など実施していく上では、より専門的な対応（就業関係、DV等家庭・交友関係への対応など）も必要になってくることが予想され、専門の人材を確保していくためには、その人を雇うための資金確保と活動や相談対応のできる場が必要になってくるとの考えから、この店舗の運営が始められた。現状では収益を十分に上げられている状況ではないが、フェアトレードに関心のある人や在住外国人への認知度も徐々に上がっていることから、重要な役割を担う事業になっていくことが期待される。



ほうふうグローバルネットの交流イベント（そば打ち体験）



フェアトレード雑貨&カフェ「Souq (スーク)」の店舗（防府市栄町一丁目1-17）  
<http://souq-yamaguchi.jimdo.com/>

### 【地域と世界を結ぶ視点】

松浦さん自身、海外生活の中で、多くの人々の支援があっという間に活動できることを実感したことで、帰国後、地域で多文化共生の必要性を改めて認識し、自ら活動することで、地方都市でも安心して外国人が生活できる地域づくりを進めている。

国際交流や国際協力・国際貢献の活動は、大都市中心に動いている状況はあるものの、地方都市においても、在住外国人は増加傾向にあり、その人たちとの交流や支援を通して、世界とつながることが可能となっている。特に、地方圏では、在住外国人支援がまだまだ進んでいないのが現状であり、より、多文化共生を支援する人材が求められている。

### 【帰国後の地方定住のススメ】

帰国後は視野が広がり、日本や地方都市に住むことやそこでの仕事につまらなさを感じたり、やりたい仕事が見つからないというのが、地方に人が定着しない大きな理由になっていると思います。

ただ、いろいろな活動を始めてから気づいたことですが、地方にも意外と多くの多様な活動をされている方がおられ、仕事と地域活動という分け方ではない、生き方として自分が住む地域のためや、困難を抱えている方のために活動されています。そして、世界とのつながりは、どんな地方都市でも身近にあって当たり前となってきており、自分の見方・考え方を変えれば、どこでもできることはあ

と思います。やりたい仕事を探すよりも、できることを探す方が、いろいろな可能性が広がるのではないのでしょうか。

私自身ができることはたかが知れていて、多くの人に支えられなければ、継続的な活動はできません。少しずつですが今の活動が広がっていているのは、支えてくださる方のお陰です。この活動はこれからも継続して取り組んでいく必要があることだと思っており、共感してくださる方の輪を広げながら、がんばっていきたいと思っています。

## 4. 協力隊OVの地方創生における活躍の可能性

### (1) 中国地方の地方創生における先進性

中国地方は、中山間地域や島しょ部を中心に、厳しい人口減少が進み、「過疎」という言葉が生まれた発祥の地と言われている。こうした厳しい環境の中で、「過疎地は何もない」「過疎地はダメだ」といったイメージが定着し、さらなる人口の流出による過疎化が進展していった。

しかし、こうした状況に対し、新たな価値観で地域を見直し活動として、1980年代に広島県北部を中心に「過疎を逆手にとる会」(現・逆手塾)が発足した。この取り組みを中心に、地域の魅力を活用した地域活性化が取り込まれるようになり、「むらおこし」、「地域づくり」といった言葉が全国的に定着するようになった。こうした、地方の資源を広く活用しようとする取り組みは、現在の地方創生に通じる部分が多い。

また、地方創生の取り組みとして、まち・ひと・しごと創生本部の担当大臣である石破大臣のコメントでも引用される島根県海士町における地域資源と外部人材を活用した離島振興は、人口の転出超過を転入超過に改善するなど、先進事例として注目を集めている。このほか、中国地方には、山口県阿武町のように、小規模市町村において社会移動が転入超過となる自治体もあり、人口の転出抑制、転入拡大を実現しているなど、地方創生の先進的な事例がみられる。

さらに、近年の地方への注目を集めるきっかけとなった、藻谷浩介ほか著「里山資本主義」(角川one21)で紹介される事例は、中国地方を舞台としたもので、再生可能エネルギーの活用や集落活性化、福祉と食・農の連携など、地域資源を活かしたくらし、しごとの新しい姿を創出した事例といえる。

このように、中国地方では、全国に先駆けて少子高齢化、過疎化が進展したことにより、地方創生の取り組みに先駆けて、地域活性化への取り組み経験が蓄積した地域といえる。

### (2) 協力隊OVの地方創生活動への親和性、活躍可能性

中国地方は、地方創生に関する先進事例が多く存在するのに対し、少子高齢化による過疎化は地域人材の不足により、地域活動のノウハウを有しながら、そうしたノウハウを受け継ぎ、地域活性化の活動に主体的に関わる人材の不足が大きな課題となっている。

特に中山間地域では、地域おこし協力隊の募集内容の状況を踏まえると、地域活動全般にわたる活動を担ってくれる人材、基幹産業である農林水産業の持続と6次産業化等による高付加価値化を担う人材、地域課題解決型のコミュニティビジネスの創出等を担う人材等の不足が顕著である。

こうした状況に対し、青年海外協力隊OVは、海外での人的資源の育成、コミュニティ開発など計画・行政分野、保健・医療、農林水産業の分野で活動した人材が多く存在しており、舞台を国内の小地域に変えても十分にその経験を活かす資質を有しているものと考えられる。

また、地域資源を活用した地域活性化の一つの核となる観光振興、特にインバウンド観光の推進が図られる中で、海外での活動経験を有する青年海外協力隊OVは語学力を含めたコミュニケーション能力や異文化の知識も豊富であり、重要な人材になることが期待される。

しかし、人材確保を希望している自治体レベルでは、青年海外協力隊OVの存在を十分認識できておらず、有用な人材を見過ごしている状況が見受けられる。こうした状況は、青年海外協力隊の窓口が国際交流関連部署となっており、地方創生、地域づくりを担う企画、地域振興部署に情報が十分行き届いていないことが原因で発生していると考えられる。

今後は、地方創生に向けた人材供給元として、青年海外協力隊OV人材のPRおよびOVへの地方での活動の可能性について情報提供等を行っていくことが必要と考えられる。

なお、青年海外協力隊のOVのネットワークは全国各地に広がっており、様々な分野で活躍しつつ、地域活動に協力的な人が多い。新たな地域で活動を始めるOVにとっては、非常に心強い存在であり、こうしたネットワークを活かしていけば、一般のIターン者よりも容易に地域に入り込んでいける可能性があり、それぞれの取組がより成功しやすい環境にあるといえる。

資料編

中国地方における地域おこし協力隊の募集内容（2009年度以降）

市町村	募集された人材の活動分野	活動分類	
鳥取県			
鳥取市佐治町	鳥取市佐治地域の「五し」（梨、和紙、佐治川石、星、話）と農林業をはじめとする産業振興を結びつけ地域の活性化を推進する人材	地場産業	
鳥取市気高町、鹿野町及び青谷町	「道の駅」設置に向けた準備活動、「街づくり会社」の設立準備、山陰海岸ジオパーク等の地域資源を活用した「イベント」の企画実施を担う人材	観光業	サービス・流津
鳥取市鹿野町	鹿野魅力創出プランナー、住民の生活支援（暮らしの支援）を担う人材	観光業	地域活動全般
鳥取市河原町	地域資源を活用した6次産業化、農林作業等、農家民泊再生、地域振興に関する企画・立案・実施業務を担う人材	農林漁業	観光業
倉吉市	関金温泉を活性化する関金温泉若女将となる人材。（関金温泉の魅力発信、地域イベント参加、関金温泉旅館組合と一緒に事業を企画など）	観光業	
境港市	伯州綿の栽培、特産化・事業化に向けた企画、販路開拓、耕作放棄地の解消に関する業務を担う人材	地場産業	
岩美町	ダイビングインストラクター、体験型観光メニュー開発など浦富海岸海中の魅力発信活動を担う人材	観光業	
若桜町	新たな観光土産品の商品開発・製造・販売を手掛け、町内で起業するとともに特産品のブランド化に向けたコーディネートを行う人材	観光業	サービス・流津
智頭町	伝統的建造物群保存地区の保存活動、林業、農業の活性化、販路拡大等を行う人材	地域活動全般	農林漁業
三朝町	農林部門（中山間地域の集落営農支援活動、魅力発見及び情報発信活動）を担う人材	農林漁業	地域活動全般
三朝町	観光部門（三朝温泉の魅力伝えるための情報発信活動、事業の企画及び運営。温泉街の再整備に向けた企画及び運営、観光資源の発掘、観光商品の商品化及び情報発信）を担う人材	観光業	地域活動全般
琴浦町	森林・里山保全リン（林）ジャー業務、サーフィンによるまちおこし業務、地域活動、行事への参画と支援、都市住民等の移住、定住及び交流事業に係る支援等を担う人材	農林漁業	観光業
北栄町	「お試し住宅」の管理、運営、農業活動への参加・農業の魅力発信活動、地域行事やコミュニティ活動に関する支援、住民の生活及び地域おこしに関する支援活動、地域の情報発信活動を担う人材	定住促進	地域活動全般
大山町	住みよい地域づくりコーディネーター、少子化・子育て環境充実コーディネーター、大山町まるごとコンダクターのいずれかの役割を担い、着任から3・4年後、起業することを目標とする人材	定住促進	子育て
南部町	体験型観光メニューの開発や民泊体制の確立等を行う人材、農家の所得向上、耕作放棄地対策等に関わる人材	観光業	農林漁業
日南町	地元農家や地域住民の生活支援を行いながら、農林業の実践的な技術を習得する人材	農林漁業	
日野町	高齢者の生活支援、農業支援、6次産業の研修、地域イベントの企画運営などを担う人材	地域活動全般	農林漁業
江府町	地域農業及び農林業者等の支援に関する活動、新規作物（梨等）の栽培管理技術の習得及び普及活動、高付加価値農産物の栽培・普及・販売促進に関する活動、特産品の開発及び販売、情報発信に関する活動、環境王国「江府町」の推進に関する活動等を担う人材	農林漁業	

市町村	募集された人材の活動分野	活動分類	
島根県			
浜田市	町内会等の地域団体、行政、大学、集落支援員等と連携し、テーマ型のまちづくり組織の設立と運営、島根県立大学と連携した地域課題の調査と解決手法の研究及び実践、市民活動支援センターの設立と運営に向けた、体制等の検討を行う体制づくり、地域活動への参加及び参画並びに住民に対する地域情報の発信を担う人材	地域活動全般	
浜田市	美又湯気の里づくり計画書の実践に向けた支援活動を担う人材	観光業	
浜田市	「木田地区ファンクラブ会員」を増やすための活動に取り組み、また地域を元気にする人材	地域活動全般	
大田市	「富山町地域おこし協議会」と連携し、米・牛のブランド化、棚田・里山景観のグレードアップ、史跡「要害山」のグレードアップ、イベント・交流事業のグレードアップ、情報発信を担う人材。地域の情報をホームページやSNSを通じて発信する業務の企画及び実施、地域・観光イベントの企画運営及び支援を担う人材	農林漁業	ITC
雲南市	三刀屋町中野地区で、小学校閉校後の地域づくりを支援する人材	地域活動全般	
奥出雲町	農林水産業（きのこ、仁多米、トマト、ほうれん草、和牛を担う人材	農林漁業	
奥出雲町	地域イベント支援（婚活イベント企画・相談支援業務、尾原ダム水源地域活性化推進業務）、地域ブランド開発（産業おこし応援研修員、産業おこしコーディネーター業務）を担う人材	地域活動全般	地場産業
奥出雲町	移住者受入促進（定住相談・若手育成コーディネーター業務、情報発信（「地域の魅力」発掘・情報発信業務、を担う人材	定住促進	
奥出雲町	観光コーディネーター業務、観光情報サイト運営業務）を担う人材	観光業	
奥出雲町	キャリア教育（横田高校魅力化コーディネーター業務）を担う人材	教育	
飯南町	「しめ縄文化の伝承」「大しめ縄の里飯南に関する誇り意識づくり」に取り組み、併せて「しめ縄の産業化と雇用の場の創出」を担う人材	地場産業	
川本町	農林業の応援・従事、環境保全活動、地域おこしの提案と実践、地域活動への参加及び参画、集落支援員及び自治会等との連携・協力を担う人材	農林漁業	地域活動全般
美郷町	子育て支援センターで、在宅親子の育児相談、乳幼児の発育測定や相談、親子の子育てイベント計画・実施、子育て親の育児教育、保育所での保育活動を担う人材	子育て	
美郷町	地域おこしの提案と実践、地域活動への参加及び参画、集落支援員及び連合自治会等との連携・協力、連絡会議・研修会・成果報告会などへの参加などを行う人材	地域活動全般	
津和野町	観光関係（まちなか再生総合事業に関する業務、商工観光・地域資源発掘に関する業務）、農業関係（冬虫夏草の生産に関する業務、産直市の活性化に関する業務ほか地域農業の活性化に関する業務）を担う人材	観光業	農林漁業
津和野町	特産品流通化業務（商品の査定とカルテの整備、1次産業と3次産業マッチング業務等）、空き店舗対策業務（候補物件の調整、宣伝業務、民間業者との体制構築等）を担う人材	サービス・流津	
海士町	島の地域資源を掘り起こしながら、地域の人やモノを活用した授業づくりと教育実践を行う人材	教育	
西ノ島町	新たな特産品の開発、地域資源、地域商材のプロモーションに積極的に取り組み、西ノ島での起業に意欲のある人材	地場産業	サービス・流津
知夫村	知夫村役場等と連携しながらホテル・観光協会業務支援、特産品の開発を担う人材で、活動終了後の起業、就業を目指す人材	観光業	
知夫村	隠岐世界ジオパーク専門員と農林水産業担い手専門員となる人材	環境	農林漁業
隠岐の島町	旧学校施設を地域コミュニティの核として賑いや特産品の開発や販売ルートの開拓など、地域住民とともに地域活性化に取り組み、隠岐の島町を元気にする意欲のある人材	地域活動全般	地場産業

市町村	募集された人材の活動分野	活動分類	
岡山県			
高梁市	地域資源を活用した体験交流型プログラムの企画・運営、移住者の受入れのための地域住民と連携した活動を担う人材	観光業	定住促進
新見市	まちづくり、コミュニティ活動の支援、地域資源の発掘及び振興に関する活動、集落の維持活性化支援に係る活動、地域の情報発信に関する活動を担い、将来的に市内において起業・就業し定住を希望する人材	地域活動全般	
新見市	復活した「備中漆」を活用した産業振興による活性化を担う人材	地場産業	
新見市	森林が持っている可能性を最大限に引き出し、造林・間伐作業をはじめ、里山を利用したきのこ栽培などの活動に取り組むことで「新見の山」を元気にしてくれる人材	農林漁業	
新見市	カウ・ボーイカウ・ガールとして、繁殖牛の飼育管理を中心とした農業支援員という位置づけで活動しながら、地域に入り込み、技術を習得し、将来的には「千屋牛」の担い手として就農し定住する人材	農林漁業	
新見市	農産物の栽培を補助しながら技術習得をし、魅力ある女性農業者を育成するとともに、農業振興と産地の活性化を図る人材	農林漁業	
備前市	高齢化に伴う地域内助け合いシステムの構築支援、高齢化に伴う地域内助け合いシステムの構築支援（伊部地域）、耕作放棄地における農作業支援、買い物難民の支援（三石地域）を担う人材	地域活動全般	農林漁業
瀬戸内市	地域社会の新たな担い手として、地域外から意欲ある人材を積極的に受け入れ、新たな視点や発想力により、埋もれている資源の発見や既知の資源を見直し、地域の潜在能力を十分に引き出すことで地域活性化の推進を担う人材	地域活動全般	
赤磐市	地域特産品の是里ワインとワイン原料用ブドウを栽培している是里地域の振興を担う人材	農林漁業	地場産業
真庭市	真庭市総合政策部総合政策課に勤務し、地域課題の調査、受入希望団体等の調整後、特定地域で地域課題に応じた支援を行う人材	地域活動全般	
美作市	農作業の従事、美作市にある地域資源の掘り起こし、地域のイベントやまつりの参加・企画、自治会との連携・協力等を担う人材	農林漁業	地域活動全般
和気町	空き家・空き店舗を活用した多様な住民サービス、住環境保全活動、住民の生活支援、地域おこしの支援を担う人材	定住促進	地域活動全般
奈義町	那岐山麓山の駅及び農産物直売所山彩村の運営支援および農家民宿等グリーンツーリズムの推進と各種体験メニューの創出を担う人材	農林漁業	観光業
西粟倉村	山林作業及び事務を担う人材	農林漁業	
久米南町	治部邸及び美しい森の管理運営等（宿泊者への対応（予約、施設説明、料金徴収等）・掃除・草刈り等の管理作業、自然・文化・人材を活用した各種体験メニューの創出と事業実施、商業・農業・観光業が連携した町づくり事業の企画立案と事業実施、情報発信・PR活動）を担う人材	観光業	地域活動全般

市町村	募集された人材の活動分野	活動分類	
広島県			
呉市	地域の行事等コミュニティ活動の支援、特産品の開発・流通・販売促進、農水産業の応援、都市との交流支援を担う人材、インターネットや広報誌を活用した地域情報の発信を担う人材	地域活動全般	
竹原市	地域資源（観光、特産品、空き家など）の発掘及び振興に係る支援、農林水産業の振興に係る支援、地区の地域おこし団体に係る支援を担う人材	地域活動全般	農林漁業
三原市	集落法人での農業従事や住民自治組織が行うイベント、まちづくり活動の運営・企画を中心に地域活動を担う人材	地域活動全般	
三原市	グリーン・ツーリズムによる観光・交流、誘客活動、地域資源を活用した体験メニューづくり、来島者へのおもてなし、佐木島の情報発信を担う人材	観光業	
府中市	木材を活用した「木育」に関する企画立案及び普及活動、地域の農産物の生産、販売及び特産品開発を担う人材（府中地域）	農林漁業	
府中市	商店街や空き店舗などを活用した振興活動、本市を積極的にPRするための市内外でのイベント活動への参加を担う人材（府中地域）	サービス・流津	地域活動全般
府中市	定住及び交流の促進に関する活動を担う人材（府中地域）	定住促進	
府中市	白壁のまちなみ（歴史的建造物）を活用した地域活動、定住及び交流の促進に関する活動、本市を積極的にPRするための市内外でのイベント活動への参加、自発的テーマ設定による活動を担う人材（上下地域）	定住促進	地域活動全般
府中市	農業体験や都市と農村の交流事業など農業分野の活動、地域の農産物の生産、販売及び特産品開発を担う人材（上下地域）	農林漁業	観光業
三次市	住民の生活支援活動、地域景観の保持活動、地域資源の掘り起こし、地域ブランド創造のための活動、市、住民自治連合会の活動補助を担う人材	地域活動全般	
庄原市	農業体験を含めた農業への従事、地域の農産物の生産及び販売、特産品の開発、その他地域おこし活動への参加、または参画などを担う人材	農林漁業	地域活動全般
庄原市	地域連携の仕組みづくりと定住促進活動、都市部からの着地型観光の推進活動、森林資源を活用した「木の駅プロジェクト」推進活動、特産品開発・販売促進活動、定住促進活動を担う人材	観光業	定住促進
庄原市	有害鳥獣（イノシシ、サル等）対策を促進、口和地域資源（モーモー物産館、鮎の里公園等）の強化による活性化、高野地域の農村体験交流の推進を担う人材	農林漁業	観光業
廿日市市	地域のイベントを通じた魅力の掘り起こしや課題への取り組み、空き家の活用による定住支援、地域資源を活かした起業を担う人材	地域活動全般	定住促進
安芸高田市	移住定住促進事業（空き家コンシェルジュ）、地域情報発信事業（地域の情報を市民に届けたい！）、安芸高田市観光振興事業、有害鳥獣対策事業、農作物の産地化・商品開発事業を担う人材	定住促進	農林漁業
安芸太田町	外国人旅行者誘致推進、町外ファン開拓事業（各種メディアパブリック情報提供等）、民泊による都市部学生との交流事業、特産品を活用した新商品開発、販売を担う人材	観光業	地場産業
安芸太田町	安芸太田ファンクラブ設立等支援事業、市街地活性化支援事業、総合型地域スポーツクラブ設立・運営支援事業を担う人材	地域活動全般	
安芸太田町	森林・林業・木材産業活性化支援事業、森林セラピー支援事業を担う人材	農林漁業	
安芸太田町	インバウンド推進事業、三段峡リバイバル支援事業、町内産品開発販促及び道の駅活性化事業を担う人材	観光業	
安芸太田町	町内県立高校魅力向上支援事業を担う人材	教育	
神石高原町	地域資源を活用したツーリズム開発等、定住・定着に向けた活動を担う人材	観光業	定住促進
神石高原町	移住・交流の促進に関する活動、定住・定着に向けた活動を担う人材	定住促進	

市町村	募集された人材の活動分野	活動分類	
山口県			
山口市	自然豊かな阿東地域で地域住民の協力のもと、特産品の販売企画や加工品の開発、ツーリズムの商品企画に取り組む人材	サービス・流津	観光業
山口市	徳地手漉き和紙技術の伝統継承と関連する〃和〃産業の振興を担う人材	地場産業	
岩国市	地域特産品の販売・開発支援（山代地域）、地域の将来計画「夢プラン」活動支援（玖西地域）、定住促進活動、地域情報の発信、農林水産業への従事活動などを担う人材	地域活動全般	定住促進
長門市	将来にわたる地域力の維持・強化を図るため、各地区に暮らしながら、地域住民とともに地域づくり活動に取り組む人材	地域活動全般	
柳井市	平郡島の実情を理解し、住民とともに地域の課題を考え、「地域の夢プラン」の実現による地域力の維持・強化を担う人材	地域活動全般	
周南市	次代に島を繋げていけるよう、地域を活性化するプラン（夢プラン）の作成支援、夢プランの実践活動の支援、地域の行事や活動の支援、地域の課題解決や活性化に必要な活動の企画・実践、災害時の対応や防災業務、公共施設の管理・運営補助を担う人材	地域活動全般	
周南市	地域づくり活動（夢プランの実践）の支援・コーディネートを担う人材	地域活動全般	
周防大島町	周防大島観光協会事務局の運営管理における事務一般、催事出展や地域イベントのスタッフ業務、観光協会が提供するサービスの充1実や観光客の誘致活動等を担う人材	観光業	
田布施町	地域行事、コミュニティ活動その他の地域おこしの支援活動、地域資源の発掘及び振興に関する支援活動、地域間交流及び移住・定住に関する活動、農林水産業の支援活動、集落の生活環境維持に係る支援活動、地域住民の生活支援に係る支援活動、地域の情報発信に関する活動を担う人材	地域活動全般	
阿武町	道の駅阿武町のリニューアルに向けて加工品の開発や生産者からの農産物の集荷、宅配事業など新たな取り組みを行う人材 地域資源を活かした体験メニューの創出や情報発信、観光看板デザインなど様々な観光アプローチを行う人材	観光業	